
魔法少女リリカルなのはStrikers やってきた炎の戦士

losepact

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers やつてきた炎の戦士

【Nコード】

N5117X

【作者名】

losepact

【あらすじ】

2001年の大消滅の際、タイムファイヤーこと滝沢直人は死んだ。だが彼は運命の悪戯により、生き返ってStrikersの世界に飛ばされてしまう。

滝沢直人と機動六課の出会いが、今ここに実現する。

注意：この作品は、半ばご都合主義で話が進みます。

なので、直人の若干のキャラ崩壊を見たくない方、ご都合主義や個人的解釈等が苦手な方はご注意ください。

Strikersの時系列は、JS事件から数ヶ月後です。

追記12/15　ちなみにゴークイジャーとの繋がりはありません。

プロローグ（前書き）

ある方からリクエストを受け、書き始めました。

駄作気味ですが、お付き合いください。

ブローグ

「浅見…お前は…変えてみせろ」

タイムレッドの浅見竜也にブイコマンダーを託し、息を引き取る直人。

だが…彼の人生がここで終わることはなかった。

某日、ミッドチルダ湾内地区。

「う…うう…」

海岸にて、シティガーディアンズの制服に身を包んだ一人の男が目
を覚ました。

彼の名は滝沢直人。

（俺は…確か死んだはず…）

直人は起き上がり、呆然と海を眺める。

…何かがおかしい。

違和感の正体は、ゼニットから受けた背中^がの致命傷が消えていたこ
とだった。

そしてもう一つは、意外にも彼の左手首にあった。

（何故…これが？）

直人の左手首には、当然のようにブイコマンダーが装着されていた。

（…ブイコマンダー？確かこれは…あの時浅見に…）

そう、竜也に託したはずだった。

（一体…何がどうなっている…？）

「なにしてるの？」

突如後ろから声をかけられ、振り向く直人の目に一人の少女が映った。

その少女は右目が緑、左目が赤…つまりオッドアイだ。

「ここは…天国か？それとも地獄か？」

思わず尋ねる直人。

すると少女は少し考え、ニコツと笑った。

「えっとね…てんごくー！」

(…そうか…やっぱり俺は…)

「俺は…死んだのか…」

だがその少女は不思議そうな表情で直人を見る。

「どうして？おにいちゃん生きてるよ？」

「生きてる…だって？」

その証拠に、ゼニットに撃たれた致命傷以外の傷が痛んだ。

自分が生きていると確信した直人は、心の中でガッツポーズをとった。

(俺は死んでないし、ブイコマンダーもある…これなら…！)

「おにいちゃん、どうしたの？」

直人の顔を覗き込む少女。

「え…あ、いや…それより、君は何処から来たんだ？」

すると少女は、すぐ側の大きな施設を指さした。

「あそこからきたの！」

それは勿論、機動六課隊舎だ。

（金持ちのお嬢ちゃんか…？）

若干の嫌悪感を覚えた直人だが、彼女はまだ子供。

そう考えて割り切った。

「…そうか」

「わたしヴィヴィオ！おにいちゃんは？」

その少女はヴィヴィオと名乗り、直人を見上げる。

「滝沢直人だ」

そつ名乗った直人だが、途端に傷が痛み出した。

「い…いてて…」

「けがしてるの？」

心配そうな表情を浮かべるヴィヴィオ。

「ああ…そつみたいだ」

「ならついてきて！おくすりあげる！」

そう言ったヴィヴィオは直人の手を引き、隊舎に向かって駆け出した。

「あ、ちょ…痛ッ！」

痛みを堪えながら、直人はヴィヴィオと共に隊舎へと歩き始めた。

プロローグ（後書き）

直人は子どもには優しいので、最初に出会うキャラをヴィヴィオにしました。

ご意見、ご感想お待ちしております！

Case File 1 新たな出会い（前書き）

タイムレンジャーって人気無いのかな？

唯一観てたスーパー戦隊だけあって、作者は今でも大好きなんです
がw

Case File 1 新たな出会い

一方、こちらは機動六課隊舎内食堂。

そこでは、三人の女性が昼食がてら、小さな会議をしていた。

「そ、それでは…」

「うん。最近ミッドチルダ各地で、犯罪組織が動いていることになるね」

「ねえ、みんな」

ちょうどその時、ライトニング隊長の金髪の女性…フェイト・T・デスタロッサ

ハラオウンがやってきた。

「どうしたのフェイトちゃん？」

顔を上げる茶髪の女性…高町なのは。

「ヴィヴィオが怪我した男の人を連れてきたよ」

「け、怪我ですか!？」

“怪我”という台詞に反応したのは、なのはの部下の一人である少女、スバル・ナカジマだ。

彼女の青い髪は短く、ボーイッシュという言葉がピッタリと当てはまる。

「うん。でも自立歩行可能だから、そんなに心配いらないよ」

フェイトがそこまで言った時、そのヴィヴィオがやってきた。

「おにいちゃん、こっち！」

ヴィヴィオに引っ張られる形で、直人も食堂に現れた。

「あの人かしら？」

もう一人のなのはの部下、ティアナ・ランスターが直人を見てそう呟く。

その男性は、キリツとした表情で顔も男前だが、どこか寂しそうな目をしている。

それがティアナの、直人に対する第一印象だった。

ガタッ！

テーブルから立ち上がったのはが、ヴィヴィオの前まで歩いてきた。

「ヴィヴィオ、怪我してる人を引っ張っちゃ駄目だよ」

なのははしゃがみ込み、目線を落としてヴィヴィオに注意する。

「…はい、ママ…おにいちちゃん、ごめんなさい」

「この子が失礼しました。私は保護者の高町なのはです」

「いや俺は…むしろ助かったぞ。ヴィヴィオ」

直人はシュンとしながら謝るヴィヴィオをフォローする。

「私はフェイト・T・ハラOWNデスタロツサといいます。あの…失礼ですが、貴方のお名前は？」

テーブルにいたフェイトもやってきて、直人の素性を伺う。

スバルとティアナもフェイトの後ろにおり、彼女についてきていた。

「俺は滝沢直人。元々はシティガーディアンズに所属していたんだが…」

ため息をついた直人はそう言ったが、なのは達四人は首を傾げた。

「は？シティ…ガーディアンズ…？それって何ですか？」

「え…？あんたら、シティガーディアンズを知らないのか？」

今度は直人が首を傾げる番だった。

シティガーディアンズは、後の30世紀におけるインターシティ警察の礎となった民間警備会社である。

重火器の使用が認められているため、ある意味正規の警察よりも徹底していることで有名だ。

「なのはさん。もしかして直人さんは、次元漂流者じゃないですか？」

スバルが一つの可能性を口にする。

「次元漂流者？」

「はい。滝沢直人さん、貴方は別の世界から来たということになります」

だが直人は薄々感づいていたのか、特に驚きはしなかった。

「そうか…ま、こっちも30世紀のモンを色々と見てきたしな…別の世界くらいあってもおかしくないだろう」

「30世紀？」

「あ、いや…こつちの話だ。しかし、ここは日本…いや地球じゃないみたいだな」

壁に貼られている地図を横目で見る直人。

「ミッドチルダっていう場所なのか？」

その地図は、ミッドチルダの首都・クラナガンを中心とした地図で、地球の地形とは似ても似つかない。

「ええ、そうです。それに私も地球出身ですけど、シティガーディアンズなんて名前の組織は本当に知りません」

なのはの表情を見る限り、嘘ではないだろう。

直人の疑問は、遂に確信へと変わった。

「じゃあ俺と高町さんは、まったく別の地球から来たってことか」

「はい。そうなりますね」

断言するなのはだが、直人にとってこれは好都合だった。

日本どころか、地球ではない場所にいればシティガーディアンズに追われることもなく、ブイコマンダーを没収される心配もない。

既に自分は死亡したと思われるだろうし、ましてや別世界にいれば尚更だ。

（とりあえず…ここを出るか…）

そう決めた直人は、なのは達の方を向いた。

「じゃあな」

「あ、おにいちゃんまって！」

立ち去ろうとする直人をヴィヴィオが呼び止めた。

「おくすり…」

「あ！そういえば滝沢さん、怪我してたんでしたね！」

直人がここに連れてこられた理由を、皆ようやく思い出したようだ。

「大した怪我じゃない。余計なお世話だ」

「駄目ですよ！私シャマル先生呼んできますから！」

スバルはそう言って、駆け足で食堂を後にした。

*

五分後、やがてスバルが二人の女性を連れて戻ってきた。

一人は金髪で白衣を着ており、もう一人は茶色のスーツを着ていた。

「シャマル先生、この人が滝沢直人さんです」

スバルに直人を紹介された白衣の女性・シャマルは、彼の前までやってきた。

「初めまして、シャルマルです。そこに座ってください」

「え？あ、ああ…」

とりあえず言われた通りにする直人。

テーブルを挟んで、直人とシャルマルが向かい合う。

「では今から回復魔法を使いますので、動かないでくださいね」

（魔法…？）

魔法という言葉が気になったが、直人は目を閉じた。

「なのはちゃん、フェイトちゃん。あの人がそうなん…？」

「そうだよはやて。次元漂流者の滝沢直人さん」

もう一人の、茶色のスーツ姿の女性は八神はやて。

この機動六課の部隊長である。

「キリッとしててカッコええ人やなあ」

はやてが自分の第一印象を呟く。

そうこうしているうちに、シャルマルによる治療が終わったようだ。

「はい、これで大丈夫ですよ」

「本当に傷や痛みが消えた…あんな凄いな…」

魔力というものを身をもって感じた直人。

「すまない、助かった。だが…あんな達は一切何者なんだ？」

「ここからは私が説明します」

はやてがシャマルの隣に座る。

「実は私らは…」

*

「…へえ…魔法を使って次元犯罪者を逮捕する、時空管理局ねえ…」

「ここはその機動六課、私は部隊長の八神はやてといいます」

（タイムレンジャーみたいなもんか？）

そう思った直人だが、すぐに考えるのをやめた。

最初は管理局への就職も考えたが、魔力を持っていないと昇進が難

しい組織だと考え、断念したのだ。

「…そうか。じゃ俺は行く。色々世話になったな」

「え、もうですか？」

「ああ、ここにいてもしょうがないしな」

テーブルから立ち上がった直人は、はやて達に手を振ると足早に食堂を去っていった。

外に出た直人は一度隊舎を振り返り、再び前を向いて歩き出した。

「とりあえず、街に行くか…」

Case File 1 新たな出会い（後書き）

ファイヤーへの変身は次回になると思います。

ご意見、ご感想お待ちしております！

C a s e F i l e 2 変身！タイムファイヤー！（前書き）

真紅の同志は神曲です！

作者は一日一回は必ず聴いていますw

Case File 2 変身！タイムファイヤー！

直人が去った後、食堂は彼の話題で持ち切りだった。

「なあなのはちゃん、直人さんって…元の世界ではどんなことしてたか知らん？」

「警備会社のシティガーディアンズに所属してたんだって。それよりフェイトちゃん、エリオとキャラは？」

「あの二人は午後から非番だから、街へ出掛けたよ」

*

市街地にて、

「あ、エリオ君！あれ可愛いね！」

「そうだね、キャラ」

熊のぬいぐるみを指さすキャラ。

二人はデートの真っ最中だった。

「じゃあ次は何処に行く？」

「ちょっと疲れたから、そのカフェにでも行こうか」

（子供は昼間っから気楽でいいな…）

そんな二人を横目で見る男…滝沢直人がいた。

機動六課隊舎を後にした彼は、カフェ横のベンチで求人情報誌を読んでいる。

（…やはりシティガーディアンズのような仕事は無しか…）

想像通りの結果に、直人がため息をついた時だった。

ガシヤアアアン！！

「おらア！てめえらこっちに来い！」

なんと黒いスーツを着た男が五人、エリオとキャロが座っていたテーブルを蹴飛ばし、二人を取り囲んだのだった。

そして、恐怖のあまり身体が動かない二人からデバイスを取り上げ、無抵抗の状態にした。

「な、何なんですか！？それを返してください！！」

キャラ口を庇う態勢に入るエリオ。

「やかましい！お前らを誘拐して、管理局から大金ふんどくつてやる！！」

真ん中の男がそう叫んだ時、キャラ口の表情が変わった。

何かを思い出したようだ。

「もしかして…あなたがクーロンスファミリー…？」

その名を聞いたエリオも驚愕の表情を見せた。

「え…それって、なのはさんが言ってた…あの！？」

「ほお、オレらのこと知ってんなら話は早い。ここにはあのドルネ口のロンダースファミリーもいねえし、商売がし易いってもんよ。いいからさっさと来いや！！」

一人がキャラ口の腕を掴んだ時、

ガシッ！

突如何者かが、男の腕を掴んだ。

「なんだてめえは？」

バンッ!!

彼は男の言葉には耳も傾けず、男の顔面を殴った。

殴られた男はその場に倒れ込んだ。

「……」

男を殴ったのは直人だ。

ロンダーズと聞いて、自然と身体が動いたのだった。

「てめえ……」

男は立ち上がり、直人を睨みつけた。

「ふんッ!」

その時、男は馬のような怪物へと姿を変えた。

他の男達も戦闘員ゼニットに姿を変えていた。

「う、うわあ!?!」

「きゃああー!」

エリオとキャラは悲鳴をあげ、腰を抜かした。

他の通行人も悲鳴をあげながら、散り散りに逃げていった。

「このムガイン様を怒らせたこと、後悔するがいいわ!!」

怪人はムガインという名のようだ。

だが直人は動じず、エリオとキャラの前に立ち、二人を庇う態勢に入った。

次に彼は左拳を握り締め、バイコマンダーを自らの口元へ近づけた。

「タイムファイアアッ!!」

その途端にバイコマンダーが光り輝き、直人が光に包まれた。

バイコマンダーが直人の音声を認識したのだ。

「うっ!!」

眩しさに思わず目を瞑るエリオ。

「エリオ君!!」

キャラに声をかけられ、エリオが恐る恐る目を開けると、そこに直人の姿はなかった。

代わりに真紅の戦士が一人、彼らに背を向けていた。

そう、直人が変身したタイムファイヤーである。

「あ…ああ…」

直人の変身を目の当たりにし、エリオが驚愕の表情を浮かべる。

「早く行け。さっき取られたモンは俺が取り返してやる」

タイムファイヤーがエリオとキャラを振り返る。

「は、はい！行こうキャラ！」

「うん！」

エリオがキャラの手を掴み、走り出した。

「逃がすな！追え！」

ムガインがゼニット達に指示を出す。

すると四体のゼニットがエリオとキャラを狙い、動き出した。

「DVディフェンダー！！」

タイムファイヤーは腰のホルダーから銃タイプの武器…DVディフエンダーを抜き、ゼニット達に向けて発砲した。

四体のゼニットは頭部や胸から煙を出し、その場に倒れて動かなくなった。

「ロンダーズとどういう関わりがあるのか話してもらおうか」

「クソッ、この野郎おッ!!」

逆上したムガインがタイムファイヤーに向かって走り出す。

「フン！」

ズキyun!

ムガインに向けてDVディフエンダーを撃つが、馬がモデルなせいか俊敏な動きでそれを軽やかに避けた。

「なにッ!?!」

「るあああッ!!」

バキッ!!

ムガインの右ストレートが、タイムファイヤーの顔面にクリーンヒットする。

「ぐあッ…！」

それをもろに食らったタイムファイヤーは吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「オレは…誘拐と殺人、スリのプロフェッショナルだ！そんなオレに勝とうなんざ、てめえ生意気なんだよ…！」

「フン、そりゃよかったな！」

そう切り捨てたタイムファイヤーはDVディフェンダーを構えた。

「DVチェンジ！ファイナルモード…！」

するとDVディフェンダーの形状が、銃から剣へと変化した。

「な、なんだと…？」

「りゃあッ…！」

DVディフェンダーを振りかざし、タイムファイヤーがムガインに斬りかかった。

ズシュッ…！！

「ぎゃあああ!!」

悲鳴をあげるムガインだが、タイムファイヤーは容赦しない。

「DVRリフレイザー!!」

X字を描くように斬りつける必殺技、DVRリフレイザー。

それは敵を圧縮冷凍する効果があるが、二回目の斬撃をムガインは辛うじてかわした。

「チツ!!」

思わず舌打ちするタイムファイヤー。

「はぁ…はぁ…危ねえとこだったぜ!!」

ムガインは息を切らしながらも、タイムファイヤーを指さした。

「おいタイムファイヤー!この借りは必ず返すぞ!」

そう言ったムガインがタイムファイヤーに背を向け、走り去ろうとした時だった。

「その前に返してもらっ!」

ズキユン！！

なんとタイムファイヤーはムガインの一瞬の隙をつき、DVディフエンダーで彼の手元を狙撃した。

「うああ！？」

それに驚いたムガインは思わず、ストラダーとケリュケイオンを取り落としてしまった。

「畜生…！」

二つのデバイスを拾おうと、ムガインはその場にしゃがみ込んだ。

カチャツ…！

それらに手を伸ばすより早く、タイムファイヤーがムガインの頭にDVディフエンダーを突きつけた。

「手を触れた瞬間に撃つ。それが嫌なら両手を挙げて立て」

「クツ…！」

ムガインは言われた通りに立ち上がる。

だが…

「はぁッ!!」

ガンッ!

「なッ!？」

立ち上がってすぐ足払いし、タイムファイヤーを転倒させたムガイ
ン。

「今日はこの辺にしようとやる!覚えてろタイムファイヤー!!」
捨て台詞を吐き、ムガインは猛スピードでその場を走り去って
いた。

「ま、待て!!」

叫ぶタイムファイヤーだが、ムガインの姿は影も形もなくなっ
ていた。

「…逃げられたか」

そう呟いたタイムファイヤーは変身を解き、直人の姿へと戻った。

Case File 2 変身！タイムファイヤー！（後書き）

ロンダーズのギエンが作ったゼニットが、何故クーロンズファミリーにいたのかは後に明らかになります。

Case File 3 直人の合流（前書き）

直人がミッドチルダに来たのは、タイムレンジャーがギエンを倒してから数日後という設定です。

Case File 3 直人の合流

「あ、あの！」

声のした方を直人が振り返ると、そこにはエリオとキャロの姿があった。

物陰に隠れながら、今の戦いを見守っていたようだ。

「あの…タイムファイヤーさん！助けてくれてありがとうございます！した！」

「ありがとうございます！」

直人は黙って二つのデバイスを拾い上げ、頭を下げる二人に手渡した。

「勘違いするな。俺は奴からロンダースについて聞き出したかっただけだ」

「ろ、ろんだーず？」

「何ですかそれ？」

エリオとキャロが首を傾げる。

「ま、お前達には関係ない。それより家は何処だ？さっきの奴がいたら危ないから送ってやるよ」

「本当にありがとうございます！こっちはです！」

*

移動すること数十分、

「こっつて…」

「はい！私達、時空管理局の機動六課所属なんです」

先程直人が訪れた機動六課隊舎だった。

「私はキャロ・ル・ルシエといいます」

「僕はエリオ。エリオ・モンディアルです」

「滝沢直人だ。でも君達、まさか機動六課の所属とはな…」

世間の狭さ以前に、このような子供が戦っているのかと感じる直人。

以前に文鳥を譲った少女と同じ年くらいであろう。

「それよりどうぞ！直人さんのこと、みんなに紹介したいですから！」

嬉しそうに言うエリオ。

「いやちよつと待て。実はな……」

ちようどいい機会だと判断した直人は、自分が次元漂流者であること、先程機動六課を訪れたことを二人に話した。

「そうだったんですか？ だったら尚更来てください」

「え……あ、ああ……」

結局直人はエリオとキャラに連れられ、再び六課隊舎の中へ入っていった。

「おかえりエリオ、キャラ……ん？」

二人の帰りを迎えるフェイトだが、後ろの直人の姿を見つけた。

「よお、また会ったな」

「直人さん！ どうしたんですか？」

するとエリオとキャラがフェイトの前に出た。

「フェイトさん、この人はさっき僕達を助けてくれました！」

「私達がクーロンスのムガインにデバイスを奪われて、それを直人さんが取り返してくれたんです！」

事情を聞かされたフェイトは驚いた。

犯罪者とまともにやり合ったにしては、直人の身体に殆ど傷が付いていないのだ。

「それに格好良かったですよ！あのタイムファイヤー！」

笑顔を浮かべるエリオとキャロ。

二人ともすっかりタイムファイヤーのファンになっていた。

「あの…二人とも、たいむふぁいやーって何？」

「ああもっ…」

面倒なことになった、といった表情を浮かべる直人。

「…とにかく、二人を助けていただいたんですね？ありがとうございます」

フェイトは直人に深々と頭を下げる。

「それより一つ聞きたいんだけど、あんた達と対立しているのはロンドーズか？」

するとフェイトは首を横に振った。

「いいえ。私達が追っているのはクローンスファミリーです。そのロンダーズとは一体…？」

「俺の世界にいた犯罪組織だ。今日戦った奴がロンダーズの名を口走ってたから気になったただけだ」

「えッ!？」

唐突な事実には驚き、彼女は思わず言葉を失った。

「ということは、クローンスファミリーは俺と同じ世界から来たってことになるな」

「私、なのはとはやてにこの事話します！直人さんも来てください！」

「ああ、わかった」

フェイトにより直人は会議室まで案内され、皆に事情を説明することとなった。

*

10分後、会議室にはなのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータが集まった。

「そうなんかあ…直人さん、そんな組織と戦ってたんや…」

ため息をつくはやて。

なのはもフェイトも顔をしかめ、ヴィータやシグナムも黙り込んでしまった。

直人はなのは達に話したのだ。

タイムレンジャーのこと、ロンダースのこと、その二つが30世紀から来た者ということ、本来自分はロンダースに殺された身であることも…

「まあ何にせよ、今日戦った奴の言動を聞く限り、クーロンズはロンダースと対立してたってことだ。そうなると、奴らもロンダースと同様に30世紀から来たってことになるな」

「滝沢さん」

なのはが拳手する。

「なんだ？」

「…この事件、滝沢さんさえよければ協力していただきたいんですが…」

なのはの提案に直人はしばらく考え、やがて首を縦に振った。

「別に構わない。だが八神部隊長、一つ条件がある」

そう言った直人は、正面に座っているはやての方を向いた。

「条件？」

「ああ。俺を隊長待遇で扱ってくれ」

「「はあ!？」」

思わぬ条件に驚く一同。

当たり前である。

何しろエリオとキャロ以外、誰も直人の実力を知らないので中々厳しいものがあるのだ。

「うーん、そやなあ…よっしゃ!」

何かを思いついたのか、はやてが直人の方を向く。

「直人さんにはこれから、模擬戦行ってもらいますわ」

「模擬戦？」

「制限時間内にガジェットを全て撃墜出来たら、直人さんを一等陸

尉待遇で迎えます」

彼の实力を知るには、実際に見た方がいいと判断したのだろう。

それとも無理だと思ったのか。

どちらにせよ、はやての考えは中々の妙案だった。

「わかった、やらせてもらおう」

直人もはやての提案を承諾したようだ。

こうして後に訓練場にて、直人の模擬戦が行われることとなった。

Case File 3 直人の合流（後書き）

次回はガジェット隊VSタイムファイヤーです。

Case File 4 模擬戦（前書き）

今更ですが、本作はゴークイジャーや他戦隊との繋がりはありません。

パラレルワールド、またはタイムレンジャー単体のつもりで書いています。

Case File 4 模擬戦

ミッドチルダ某所、

タイムファイヤーから命からがら逃げ帰ってきたムガインは、アジトで仲間二人と話し合いをしていた。

話題は勿論、タイムファイヤーについてである。

「やから言つたやるムガイン。管理局の餓鬼なんか放つとけつて…」

「違う…！あのタイムファイヤーさえ居なければ！オレの作戦は完璧だったんだ…！」

机をドンと叩き、反論するムガイン。

「デバイスを奪って、奴らを誘拐して、管理局に身の代金を要求するつもりだったんだ…！」

すると関西弁の男はため息をつき、もう一人の男は葉巻を吸いながらムガインの方を向いた。

「…で、お前はどうしたいんだ？」

「タイムファイヤーに復讐して…奴を血祭りにあげてやるさ…！」

そう言ったムガインは拳を握り締める。

「こうなったら…！」

呆れる二人に背を向け、ムガインはその場を後にした。

「勝手にせえや…」

*

一方、こちらは機動六課隊舎の模擬戦場。

売店で買ったのか、直人は赤いベレー帽を被っている。

「こいつがガジェットか」

彼の前には、十機の小型ガジェットが準備されていた。

「はい。滝沢さんには、これらを30秒以内で全部倒してもらいます」

彼の後ろで、なのはがそう言った。

その模擬戦場の周りにはベンチがあり、先程の会議に参加できなかった者達が座っていた。

「ティア、二人から聞いた“タイムファイヤー”って何だろうね？」
隣のティアナに問うスバル。

「さあ、魔力の類じゃなさそうだけど…あの人、魔力持っていないから無理じゃない？」

「でもあれほどの自信…直人さん、実は凄いいんじゃ…」

スバルの姉、ギンガも気になっているようだ。

「直人さん、準備ええか？」

なのはの隣にいるはやてが問う。

「ああ。いつでも」

ガジェットを見つめたまま、直人はそう返した。

「では始め！」

はやての合図と同時にガジェット達は動き出した。

ブンッ…

それに合わせ、帽子を頭上に放り投げる直人。

そしてブイコマンダーを口元へ近づけた。

「タイムファイヤーアツ!!」

瞬時に直人の全身を光が包み込み、彼はタイムファイヤーへと変身した。

「あれが、タイムファイヤー...?」

エリオの隣に座っているフェイトが、ようやくその意味を悟る。

「はい!そうです!」

「格好良い...」

目を輝かせるエリオとキャロ。

二人を除くフォワード陣や隊長陣も相当驚いたのか、タイムファイヤーを見つめたまま黙り込んでしまった。

「D.V.ディフェンダー!!」

素早くDVディフェンダーを抜いたタイムファイヤーは、バルカンモードで一度にガジェットを四機撃墜した。

「は、速い！」

驚く一同だが、タイムファイヤーは彼女らを余所に残りのガジェットを確認する。

「残りは六機か…DVチェンジ！ディフェンダーソード！！」

ドドドドドドドド！！

DVディフェンダーを剣へ変形させた時、二機のガジェットがタイムファイヤーを狙撃してきた。

だが彼はそれをひらりとかわし、地面を蹴ってその二機との距離を詰めた。

「りゃあッ！！」

ズシャッ！！

ドガアアアン！！

「ッしゃあ!!」

ズシャツ!!

ドガアアアン!!

「ほう…滝沢の動きは中々のものだな」

腕を組んだシグナムがそう呟く。

実際直人の動きはキレが良く、無駄が無い。

それはタイムファイヤーに変身しても変わることはなかった。

「よし、バルカンモード!!」

難なく二機のカジエツトを斬り捨て、タイムファイヤーは再びDV
ディフェンダーを銃に戻した。

残りのカジエツト達に狙いを定めるつもりなのだ。

「あと十秒や…」

はやてが静かにそう呟く。

残りのガジェットも同じ場所に集まり、標的に狙いを定めた。

だがそれより一瞬早く、タイムファイヤーがDVディフェンダーの引き金を引いた。

「無駄だ」

ズキュン！ズキュン！ズキュン！ズキュン！

攻撃は全てのガジェットを貫いた。

ドガアアアアン！！

「…そ…そ、それまで…！」

驚きつつも、終了の合図を出すはやて。

だが彼女だけでなく、皆が直人の予想以上の強さに驚きを隠せなかった。

「凄いです直人さん！」

ただエリオとキャロの二人は、タイムファイヤーの変身を解いた直人に向かって拍手していた。

フリードもキャロの周りを飛び回り、喜んでいるようだ。

（絶対無理や思たのに…あの人も変身機能も凄いなあ…）

心の中で、はやては直人の力を認めた。

直人は元シティガーディアンズなので、銃の扱いには慣れている。

その上ロンダーズとの戦闘経験豊富な彼が、ガジェット十機を30秒以内に全て撃墜させることなど容易かったのだ。

「ま、このくらいは当然だ」

直人はなのは達の前まで戻り、そう言った。

「で…でも、魔力無しで凄いですね」

このなのはの台詞により、直人には彼女らに欠けているものがわかった。

「逆にあんた達がその魔力に頼り過ぎだと思っぞ」

「えっ…」

予想だにしなかった台詞に、言葉を失うのは。

「ま、そんなこと俺には関係無い。それより八神部隊長、約束通り俺を隊長待遇で扱ってくれるよな？」

「も…勿論！約束しましたやん！」

絶対に無理だと思っていた本音を隠すかのように、はやては直人の仲間入りを認めた。

「それにしても直人さん、どうして機動六課に入隊希望したんですか？」

ずっと気になっていたのか、スバルは直人に問い掛けた。

「…自分の力を試してみたくっただけだ」

「あの！直人さん！」

今度はエリオが声をかけてきた。

「……ん？」

一度投げた赤いベレー帽を拾い上げ、直人は彼の方を向いた。

「隊長待遇ってことは、僕達を指導してくださるんですよね！？」

直人は少し考えたが、彼が答えを出すより早く、なのはとフェイト

が口を開いた。

「是非お願いします。週に一度だけで構いませんから」

「エリオ、キャロ。直人さんに鍛えてもらってね」

少し頭を掻き、直人はベレー帽を被り直した。

「…わかった。簡単にデバイスとやらを奪われるようじゃ話にならないからな、護身術くらいは教えてやる」

「あ…ありがとうございます！」

「よろしくお願いしますね」

相変わらず言葉に棘がある直人。

だがエリオもキャロも彼を信用しているようであり、それは隊長陣やヴォルケンリッター、ナカジマ姉妹も同様だった。

（何よあの言い方…）

そう、ティアナを除いては…

こうして直人が、機動六課隊長陣に加わった。

だがこれが六課及び管理局の運命を変えることになるうとは、この時誰も気づいていなかった。

Case File 4 模擬戦（後書き）

直人の口調、次回からはもう少し和らげます。

ちなみにクーロンズファミリーのメンバーは、動物をモチーフにしています（一部例外あり）。

Case File 5 二人の確執（前書き）

何か特殊なイベントが無いと、直人とティアナは仲良くなれませんね。

Case File 5 二人の確執

滝沢直人が一等陸尉待遇を受けてから翌日、

「おはようございます直人さん！」

食堂にて、食パンをかじっている直人にスバルが声をかけてきた。

「一緒にしてもいいですか？」

「…ああ」

笑顔の彼女に対し、直人は素っ気なく答える。

だがスバルはそんな直人に対し、笑顔を浮かべながらテーブルに座った。

「直人さんって魔力は持ってないんですね？」

スバルはロールパンを頬張りながら、直人に魔力の有無を尋ねる。

「まあな。昨日改めて検査を受けたが、魔力は確実に無いそうだ」

コーヒーを啜りながらため息をつく直人だが、そんな彼に近づく二つの影があった。

「おにいちゃん、スバルさん、おはよう！」

直人とスバルが声のした方を向くと、なのはに手を引かれたヴィヴィオがやってきた。

「おはようございます！なのはさん、ヴィヴィオ！」

「よお」

相変わらず素っ気ない直人だが、その大きな手でヴィヴィオの頭を撫でた。

「えへへ…！」

「よかったねヴィヴィオ。何の話してたのかな？」

なのはとヴィヴィオもテーブルに座り、直人とスバルの会話に入っていた。

「俺に魔力が無いって話だ。ま、このバイコマンダーさえあればそんなモン要らないがな」

「その機械も30世紀の物ですか？」

なのはがバイコマンダーを見ながら質問する。

「ああ。これはタイムファイヤー以外にも使い道があるんだが…」

そこまで言った直人だが、途中で口を噤んだ。

（ブイレックス…お前は今何処にいるんだ…？）

直人が気になっていること……それはやはり相棒の巨大口ボ、ブイレックスのことだ。

実は昨夜、ブイコマンダーに呼び掛けたが反応はなかったのだ。

「——さん、直人さん！」

「あっ！」

ハッと我に返る直人。

「わ、悪い……」

「おにいちゃん、具合わるいの？」

ブイブイオが直人の顔を心配そうに覗き込む。

「大丈夫だ。それより高町さん、今日は本当に俺が？」

「えっ…なのはさん、直人さんに何かお願いしたんですか？」

するとなのははニコツと笑い、首を縦に振った。

「うん。午前中の訓練監督、滝沢さんにお任せするんだよ」

「本当ですか!？」

思わずスバルが目を輝かせる。

「どうしたスバル？」

「だって直人さんの訓練、すごく気になるんですもん！何をするんですか？」

スバルも魔力を持たない直人の訓練に興味津々のようだ。

そんな彼女に対し、直人は若干呆れながらも説明することにした。

「訓練内容は体力づくりだ。あんた達は魔力に頼り過ぎているところがあるからな」

「にやはは、それを言われちゃどうしようもないですね」

苦笑するなのは。

「それより滝沢さん、管理局の制服は…着ないんですか？」

なのはの疑問も尤もである。

直人は時空管理局の制服ではなく、まだシティガーディアンズの制服を着用している。

「昨日試着したが、やっぱりこっちの方がしっくりくるんだ」

「あれ…？でも確かその服、ボロボロだったんじゃない？」

直人の制服を凝視するスバル。

「自分で縫い直した。俺はそろそろ模擬戦場へ行く。だから他の連中に早く来るよう伝えるよ」

そう言った直人は食器を戻し、食堂を後にした。

*

そして30分後、模擬戦場にスバル、ティアナ、エリオ、キャロが到着した。

「一等陸尉殿、よろしくお願いします！」

ティアナが直人に対し、敬礼する。

「滝沢でいい。じゃあ全員、デバイスをその場に置け。今日は皆、組み手や自主トレだ」

「「はい！」」

（え！？）

まさかのデバイス無しに、耳を疑うティアナ。

だがそれは空手のインターハイ優勝経験のある、直人だからこそできることだった。

「あの…模擬戦は無しですか？」

「不満なら参加しなくていい。これはあくまで自由参加だ」

そう言う直人に対し、ティアナは続けた。

「…滝沢さん。私達はデバイスで犯罪者を捕まえ、平和を守るんです。デバイスを使つての訓練や模擬戦こそ、上達への最大の近道だと思います！」

「それなら高町さんに頼め。それに体を鍛えてからデバイスを使つた方が、よりいい動きができる。俺は思うが…違うか？」

両者の間に険悪な空気が流れる。

「や、やめなよティア。直人さんの言うことに一理あるよ」

そんな空気を見かね、スバルがティアナの肩に手を置き、彼女を宥める。

するとティアナはクロスミラージュをその場に置き、直人の顔を見上げた。

「…失礼しました。では改めてよろしくお願いします！」

直人は腕を組んだまま黙っていたが、やがてため息をついた。

「…よし、始めるぞ」

*

三時間後、

「それまで！」

「は……はい」

直人の号令を聞き、エリオが腕立て伏せを中断する。

「はぁ……はぁ……」

「あー疲れた！」

組み手をしていたスバルとティアナ、ランニングをしていたキャロも直人の前へ集合した。

「よく頑張ったな。俺の訓練は以上だ」

「「ありがとうございます！」」

四人が直人に頭を下げ、解散する。

（こんなこと本当に役に立つのかしら……？）

「どうしたのティア？ボーっとしてないで早くご飯食べに行こうよ！」

そう言ったスバルはティアナの手を引き、食堂へ走っていった。

「キャラ、僕達も行こうか」

「うん！」

エリオとキャラも移動を開始する。

そんな光景を物陰から覗く男が一人。

「そうかあ、管理局は魔力が無いとゴミ同然ちゅーわけか。ククク
…これはええこと聞いたでえ…！」

そう呟いた男はニヤリと笑い、機動六課隊舎から姿を消した。

*

その頃、アジトを後にしたムガインは、ミッドチルダの首都・クラナガンへと赴いていた。

「よし、タイムファイヤーをあぶり出す！行けゼニット…！」

怪人へ変身したムガインの後ろから、十数体のゼニットが姿を現す。

彼らは独特なステップを踏みながら、通行人を銃剣で襲い始めた。

「きゃああああ!!」

「うわああああ!!」

悲鳴をあげ、逃げ惑う人々。

「出て来いタイムファイヤー! テメエが出て来ねえと、この街は滅茶苦茶だあ!! ガハハハ!!」

ムガインの狂った笑い声がクラナガンに響き渡った。

Case File 5 二人の確執（後書き）

次回から再びムガイン戦です。

ご意見、ご感想お待ちしております！

Case File 6 ムガインの逆襲（前書き）

皆さんからのご意見・感想、とても励みになります！

ありがとうございます！

Case File 6 ムガインの逆襲

昼休み、食堂にて直人は一人でラーメンを啜っていた。

（あいつは…ティアナは何を焦っているんだ…？）

デバイスの使用にこだわるティアナについて、直人は考えを巡らせていた。

もしかして彼女も、かつての自分と同じく力を求めているのか。

「直人さん、考え事？」

俯く直人の正面に、一人の少女が食器を持って座る。

「八神部隊長か……ん？」

はやてに目をやった直人は思わず目を疑った。

なんと彼女の肩の上に小人がいるのだ。

「な…なんだそいつは？」

「そういえば直人さんは初めてやったな。この子はリインフォース？（ツヴァイ）。基本的には私や副隊長のサポートが仕事なんよ。仲良くしたってな〜！」

するとリインフォースと呼ばれた小人は直人の方を向き、ぺこりと

お辞儀した。

「初めましてです直人さん！リインと呼んでほしいです！」

「あ、ああ……」

この時直人が、同じようなポジションにいたタイムレンジャーのサポートロボ・タックを思い出したのは内緒だ。

「ところで直人さん、訓練はどうやったん？」

「今のところ、一番体力があるのはスバルだな。ま、他の奴らも鍛え方次第でどうともなるさ」

そう言った直人は再びラーメンに箸をつけた。

「それより直人さんて、昼間から凄いもの食べるんやね……」

「え……これがか？」

そう、彼が食べているのは只のラーメンではない。

機動六課隊舎の食堂で出される麺類の中で、最も濃厚な“こってりチャーシュー麺”、しかも大盛りである。

あまりにも濃厚かつ大盛りなため、完食者は現在のところスバル・ナカジマの一名のみである。

「俺はこういうのが好きなんだよ」

そう言つてすぐ、直人は二人目の完食者となった。

「ならええけど…」

「凄い人です…」

そんな彼を見てはやてとリインがため息をついた時、隊舎内全域に警報が鳴り響き始めた。

《クラナガン都市部にてクーロンズが出現！大至急現場に急行され
たし！》

ガタッ！

即座に立ち上がった直人は、はやての方を向いた。

「八神部隊長…！」

「うん。機動六課出撃や！」

そして直人、はやて、リインの三人は食堂から駆け足で飛び出した。

*

「あ、なのはちゃん！みんな！」

ヘリポートにて、スターズとライトニングに加え、ギンガの九名がいるのが見えた。

全員バリアジャケット姿となっている。

「はやてちゃん！滝沢さん！」

八人の方も直人達に気づいたようだ。

「スターズ分隊とギンガは地上から、ライトニング分隊はヘリで空から戦闘エリアに入って！」

テキパキと指示するはやて。

「八神部隊長、俺は？」

「直人さんはライトニングと一緒にヘリに乗って！指揮権は直人さんにもあるから、その場の判断はお任せするよ！」

はやての指示を聞き、頷いた直人はブイコマンダーを口元へ近づけた。

「タイムファイヤアッ！！」

直人がタイムファイヤーに変身したと同時に、スターズとギンガが転移し、ライトニングがヘリへ乗り込んだ。

「さ、ダンナも早く！」

ヘリのパイロット・ヴァイスがタイムファイヤーにそう呼び掛ける。

「ああ。食後の運動にちょうどいい」

そう言ったタイムファイヤーを乗せたヘリは、そのままヘリポートから飛び立っていった。

「みんな…頼んだよ」

はやてとリインは、小さくなっていくヘリを静かに見送った。

*

数分後、ヘリはようやく都市部の上空に到着した。

下を覗くと、既に到着したなのは、ヴィータ、ギンガ、ティアナの四人がゼニットと交戦中であり、十数名の局員とスバルが市民の避難を手伝っていた。

「フェイトさん！僕達も地上の援護を…」

「その必要はない」

エリオの台詞を遮るように、タイムファイヤーが口を開いた。

「で、でも！」

「エリオ…あれが見えるか？」

タイムファイヤーの指さす先には、セダン型自動車を持ち上げているムガインの姿があった。

「あ！あいつは…！」

「お前達が降りたら、またデバイスを取り上げられるだけだ。それに恐らく…奴の狙いは俺だ」

彼の言う通り、ムガインは駆けつけた局員達には目もくれず、車をひっくり返している。

「俺が奴を引きつける。スターズ分隊はゼニット相手に善戦しているようだから大丈夫だろう。ライティング分隊はそのまま待機だ」

そう指示するやいなや、タイムファイヤーはヘリのドアを開け、車から逃げた市民を襲っているムガイン目掛けて飛び降りた。

「は、はい…！」

思わず返事してしまうフェイト。

「ダンナの指揮…かなりの確ツスね」

感心するヴァイスだが、彼は以前の直人をあまり知らない。

「D Vディフェンダー!!」

D Vディフェンダーをディフェンダーソードへチェンジし、それを振り上げてムガインに斬りかかる。

「ん…?とあッ!」

ムガインもタイムファイヤーに気づき、素早い動きで斬撃を避けた。

スタツ!

着地するタイムファイヤーを見て、ムガインは静かに笑う。

「…ハハハハ、待ってたぜタイムファイヤー!」

そんな彼に対し、タイムファイヤーはエンブレムを突きつけた。

「クローンス!これ以上の勝手な真似はさせんぞ!」

「ハハハ!それはこっちの台詞だあッ!!」

ペリッ！

そう叫んだムガインは腰に手をやり、貼られていたシールのようなものを剥がした。

ゴゴゴゴゴゴゴ…！！

するとみるみるうちにムガインの身体が巨大化し、周囲のビル以上の大きさとなった。

「な…！」

舌打ちするタイムファイヤー。

『ハハハハハハ！実はオレもロンダーズに解凍された身でね…だがドルネロと反りが合わず、クーロンズファミリーに寝返ったのさ！』

そう、ムガインは元ロンダー囚人だったのだ。

しかも解凍されて造反する際、ゼニット数体と囚人のカプセルを三つ強奪し、前者をクーロンズのアジトで量産していたのだ。

「…だからゼニツトが沢山いたのか！」

『そういうわけだ。言っただろう？オレはスリのプロフェッショナルだってな。だが…お前が喋るのはそこまでだぁッ！』

巨大化したムガインがタイムファイヤーを踏み潰そうと、左足を彼の上に叩き落とした。

「くッ…！」

ドスン！！

ギリギリのところで、タイムファイヤーは後ろに飛び退いてかわす。

（来るかどうかわからないが…）

少々不安になったが迷ってはられない。

タイムファイヤーはブイコマンダーのマイクに呼び掛けた。

「…来い！ブイレックス！！」

バチッ…！

『何だ今のは！？何をした！？』

空で鳴った雷のような音に驚いたムガインが辺りを見回す。

だが…

（くっ…！）

いつまで経ってもブイレックスは現れない…

どうやら失敗したようだ。

「直人さん！そちらにゼニットは…！？」

タイムファイヤーが声のした方を向くと、ゼニットの排除を完了したギンガが彼の前にやってきた。

「駄目だ！来るな…！」

だがその時、

ガシャンッ！！

なんとムガインの手が当たり、崩れたビルの瓦礫がギンガに降ってきたのだ。

「あ…！」

彼女は頭上を見上げ、自身に迫る危険を察知するが、回避は間に合わない。

「危ない…！」

気がつくとタイムファイヤーは、思い切りギンガを突き飛ばしていた。

直人自身も、何故自分がこのような行動をとったのかわからなかった。

そして…

ガシャアアアン…！！

「な…直人さん…！」

ギンガは助かったものの、瓦礫はタイムファイヤーに容赦なく降り注ぎ、やがてそこには大きな瓦礫の山が出来ていた。

Case File 6 ムガインの逆襲（後書き）

直人が食べていたこってり系のラーメンは、彼を演じた笠原紳司さんの好物だそうです。

あと直人がギンガ（というより他人）を庇うのは…OKですよね？
本編でも女の子庇ってましたし、ゴーゴーフアイブとの共演では異博士を庇ってピエールに撃たれてたんで。

Case File 7 激震の大恐竜（前書き）

今回は遂にあいつが登場します。

Case File 7 激震の大恐竜

「直人さん！直人さん！！」

ギンガが立ち上がり、瓦礫の山に向かって何度も直人の名を叫ぶ。

その上空で、なのはがエクセリオンバスターを、地上ではティアナがクロスファイヤー・シュートをムガインに撃つが、彼には全然効いていない。

『心配しなくてもお前らも送ってやるよ！！』

不敵に笑うムガインがギンガを踏み潰そうと足をあげた、その時だった。

ゴゴゴゴゴゴ…！

「な、何？」

「あれは…！」

なのはとティアナが空を見上げ、絶句する。

突如雷のような音が鳴り響き、空にブラックホールのような小さな

空間が出現した。

「エライことになったなあ……」

ヘリの操縦桿を握り締め、空間を横目に見たヴァイスはそう呟く。

「直人さん……」

「ティアさん……みんな……」

ヘリで待機中のエリオとキャロは、地上で戦っているメンバーの身を案じている。

それは隊長のフェイトや、副隊長のシグナムも同様だった。

突然のムガインの巨大化に、謎の空間が出現…皆が困惑していた。

『な、なんだあれは！？』

一方ムガインも、空間の出現に動揺を隠せない。

そんな彼の足下では、タイムファイヤーがDVディフェンダーで瓦礫を粉碎し、脱出しようとしていた。

「直人さん！こっちへ！」

ギンガがタイムファイヤーに手を差し伸べ、彼を引き上げる。

瓦礫から脱出したと同時に、タイムファイヤーの変身は解けた。

「はぁ…はぁ…すまない」

「い…いえ。助けていただいたのは私ですから…ありがとうございます！」

礼を言ったGINGAは直人に頭を下げる。

「気にするな」

「あ、血が…！」

直人の額から血が流れるのを見たGINGAが、ハンカチを取り出して彼に手渡す。

「必要ない」

そつぱを向く直人だが、GINGAはハンカチを彼の傷口に当て、黙って血を拭き始めた。

「結構背高いんですね、直人さん…せめてこの位はさせてください」

「…わかった」

根負けしたのか、素直になる直人。

「…あんたに怪我はないようだな。それに、あれは一体…」

そつ眩き、上を向く。

ようやく直人も、空に現れた空間の存在に気づいたようだ。

「ええ、今さっき出現したんです…」

直人の血を拭き終えたギンガが、不安そうに空間を見上げている。

（あれは……いや、ひょっとして…!）

何か閃いたのか、直人の表情が微妙に変わった。

彼はこの時、ブイレックスが初めて姿を現した時のことを思い出していた。

「…どうしたんですか？」

首を傾げるギンガを余所に、直人は再びブイコマンドーのマイクに呼び掛けた。

「頼む……来オい！ブイレックス!!」

《グオオオオオオオオオン!!》

突如、獣の雄叫びが都市部に響き渡る。

その瞬間、空間から巨大な影が飛び出し、ムガインの正面に着地した。

《グオオオオオン！！》

『なんだこいつ…タイムファイヤーの仲間か！？』

ムガインが正面を向き、その影に対して叫ぶ。

それは恐竜のような姿をしており、銀と赤、黒のカラーリングである。

「よく来たな…ブイレックス！」

そう、タイムファイヤーの相棒にして恐竜型の生体ロボ…ブイレックスが時空を越え、遂に現れたのだ。

*

「な、なんだあれ…!？」

「す…凄い…」

地上で奮闘していたスバルとティアナは、ブイレックスを見上げながら驚きのため息をもらす。

それは空にいたのはとヴィータも同様だった。

(これが…滝沢さんの…?)

「う、うわわ!? 何あれ!？」

「ヴォルテール…!?!?…じゃないね」

ヘリから状況を見守っていたライトニングも、突如現れた巨大な恐竜を目の当たりにして驚きを隠せないでいた。

「な、直人さん! あれは…」

うろたえるギンガ。

「あいつは味方だ」

それだけ言うと、直人は再びブイコマンダーを通じてブイレックス

に呼び掛けた。

「ブイレックス！奴を都市部から遠ざける！」

するとブイレックスは太く長い尻尾を振り、ムガインに叩きつけた。

バシィッ！！

『ぐあああッ！！』

攻撃を受けたムガインは、施設が一切無い空き地のような場所へ吹き飛ばされた。

『ぐうッ…痛え…！』

右肩を押さえながら立ち上がるムガインの隙をつき、すかさず直人が「V」の文字が書かれたボタンを押す。

「ボイスフォーメーション！ブイレックスロボ！！」

《グオン！》

短く鳴いたブイレックスの上半身が段々と上へあがっていき、更に背が高くなる。

両腕も、ミサイルを六基装備した右手と、力強い左拳へと変わった。

そして恐竜形態の頭が胸元へと倒れ込み、赤い一本角の頭部が顔を出した。

そう、もう一つのブイレックスの姿…ロボット形態のブイレックスロボの誕生である。

*

「ロ…ロボットになった！」

「カッコいい…！」

エリオとキャロが目を輝かせ、ブイレックスロボに釘付けになる。

「直人さん…」

直人の力に驚いたのか、それともブイレックスに驚いたのか、フェイトがため息をつく。

どちらにしろ、機動六課にとって大きな戦力となることは間違いないかった。

*

機動六課本部でも、ブイレックスの登場は局員達を混乱させていた。

「あれはいつたい…」

機械好きの通信士…シャリオ・フィニーノが、モニター越しにブイレックスロボを見て息を飲む。

「確かにこれやったら、あの巨大クローンズを取り押さえれるかも…」

はやての表情に希望が戻る。

「頼んだよ。直人さん…」

*

「つ…強そう…」

ギンガがブイレックスロボを見上げ、そう呟く。

「いや。強いぞ」

直人もそれだけ言うと、「F3」のボタンを押してブイレックスロ

ボに指示を飛ばした。

「リボルバーミサイル!!」

ドドドドドドド!!

ブイレックスロボが右手を突き出し、六基のミサイルをムガイン目掛けて連射する。

『がああッ…!!』

ミサイルは全弾ムガインに命中し、爆散する。

「そろそろだな…」

そう呟いた直人は、最後に「F1」ボタンを押した。

「マックスブリザード!!」

するとブイレックスロボの両肩から、緑色の光がムガインに向けて発射された。

マックスブリザードは敵を圧縮冷凍させる効果があり、一度捉えら

れるともう逃げられない。

『ぐっ…卑怯だぞタイムファイヤああああ…!!』

ムガインの断末魔が地上に響くと同時に、彼の動きが止まった。

「ジ・エンド！」

直人の決め台詞と同時に、動けないムガインがみるみるうちに縮んでいく。

そう、圧縮冷凍に成功したのだ。

「ギンガ、ここは任せたぞ」

その場をギンガに任せた直人は、圧縮冷凍されたムガインを回収すべく走り去っていった。

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

直人を見送るギンガのもとに、市民の避難を終えたスバルとティアナ、ヘリから降りたエリオとキャロが駆け寄ってきた。

「大丈夫だったギン姉！？なんか大きな音したけど…」

「ええ。直人さんが助けてくれたから…」

自らの身体をはたき、埃や汚れを払うギンガ。

（もし直人さんが庇ってくれなかったら…）

彼女の瞳には、自分を庇ったタイムファイヤーに降り注いだ瓦礫が映っていた。

「ならよかった！」

「それにしても、滝沢さん…こんなもの持ってたなんて…」

ブイレックスロボを見上げるティアナ、エリオ、キャロ。

このような巨大ロボットは、テレビや映画でしか見たことがない故か、かなり驚いているようだ。

「あ、戻ってきましたよ！」

キャロの視線の先には、ムガインを回収したカプセルを手にし、こちらへ走ってきている直人の姿があった。

「直人さん！これ凄く格好いいですね！」

目を輝かせるエリオを余所に、直人は再び「V」ボタンを押した。

「リバーフォーメーション！ブイレックス！！」

するとロボット形態のブイレックスロボが変形し、恐竜形態のブイ

レックスへと戻った。

「滝沢さん、ありがとうございました！」

「凄いな滝沢！あんなもん呼び出しちまうなんて！」

空からなのはとヴィータが降りてきた。

「みんな、撤収するよ。処理は別部隊に任せることになったから」

「はい！」

返事するフォワード隊。

直人はブレックスを見上げ、ブイコマンダーに呼び掛けた。

「ブレックス、ヘリの後について行け。建物や人を踏むなよ」

《グオオオオン！！》

「わかった」と言ったのか、直人に返事するブレックスの雄叫びがクラナガンに響き渡った。

Case File 7 激震の大恐竜（後書き）

何故ブイレックスがミッドチルダに来たのか、理由は後に明らかになります。

Case File 8 クーロンスの陰謀（前書き）

投稿して一ヶ月前後で文章・ストーリー評価をいただきました！

本当にありがとうございます！

Case File 8 クーロンスの陰謀

ミッドチルダ某所、

「今戻ったで〜」

機動六課隊舎を覗いていた男が、少々薄暗い部屋へ帰還する。

その部屋には男がもう一人おり、相変わらず葉巻を吸っていた。

「ダリルか。例の件はどうだ？」

するとダリルと呼ばれたその男はニヤリと笑う。

「バッチリやボス！あんたの睨んだ通り、時空管理局は中々の魔力中毒やわ。やっぱ例のアレ、作った方がええよな？」

「ああ。その方が実質敵の数が減り、我々クーロンスファミリーの商売がし易くなる。そういえばムガインが圧縮冷凍された。ついでさっきだ」

それを聞いたダリルは驚き、バツの悪そうな表情を浮かべた。

「はあ！？…ああ、あいつアホやる！ワイは頭悪い奴が一番嫌いなんや！！」

「捕まった奴のことは放っておけ。それより、ゼニットを量産しておけよ」

ボスは一切表情を変えず、そう言った。

「…はいよ。このワイに任しとき」

そう言ったダリルは『研究室』と書かれたドアを開け、そこに入っていた。

*

午後三時半前後、機動六課隊舎にスターズとギンガが帰還し、その十分後にライティング達を乗せたヘリが帰還した。

「なのはママ、フェイトママ。おかえり！」

寮母のアイナに連れられ、ヴィヴィオがなのは達を出迎える。

「ヴィヴィオ、ただいま！」

ヘリから降りたフェイトがヴィヴィオを抱き上げる。

「ただいま〜ヴィヴィオ〜！」

フェイトに抱かれているヴィヴィオに向かって、スバルが手を振る。それを見た他のフォワードメンバーも、ヴィヴィオに笑顔を向けた。

だがヴィヴィオは突如周りを見回し、何かを捜し始めた。

「ヴィヴィオ、どうかしたの？」

フェイトの正面に回り込んだのはが尋ねる。

「…直人おにいちゃんは？」

ヴィヴィオが捜しているのは直人だ。

昨日出会ったばかりにもかかわらず、かなり彼に懐いていた。

「直人さんなら自分で帰るって……でもちよつと遅いなあ…」

エリオが心配そうな表情を浮かべた、その時だった。

ズシン…！ズシン…！

遠くから何やら音が聞こえてくる。

それは一定のリズムで響き、段々大きくなってきた。

「帰ってきたのか…？」

後ろを振り返り、上を見上げたヴァイスの推測は当たっていた。

タイムファイヤーを頭に乗せたブイレックスが、ヘリポートのすぐ横まで来ていたのだ。

「ブイレックス、止まれ」

足を止めたブイレックスの頭から、タイムファイヤーが飛び降りる。

「りゃあッ！」

スタッ！

彼は一同の前に無事着地した。

「滝沢さん、お疲れ様でした」

スターズとライトニング、変身を解いた直人が互いに敬礼する。

「ああ」

「みんなお疲れ！」

隊舎からはやとリイン、シャーリーが駆けてきた。

そんな三人は勿論、帰還したなのは達も、当然の如く一ヶ所を見上げていた。

《グオオオオン！！》

「実際に近くで見ると中々威圧感あるな、あの子…」

ブレックスを見上げ、はやてが顔をひきつらせる。

だが機械好きのシャーリーは目を輝かせ、直人に駆け寄ってきた。

「直人さん！是非あの子とブイコマンダーを一度私に…」

「駄目だ」

「そんなあゝ…」

シャーリーが残念そうにうなだれる。

実は彼女、昨夜も直人にブイコマンダーを研究させてほしいと頼み、断られたのだ。

勿論、直人も直人で理由もなく断ったのではない。

シティガーディアンズの研究班にボイスキーを解除された為、今や大体の者がタイムファイヤーに変身でき、ブレックスが使用可能となる。

それが時空管理局に知られると、以前のようにブイコマンダーを没収され、お払い箱にされる恐れがあると直人は考えたのだ。

「…いや、ブイレックスだけなら見てもいいが…」

流石に可愛いそうに思ったのか、それともブイコマンダーさえ見せなければ大丈夫だと思ったのか、直人はシャーリーにブイレックスの研究を許可した。

「あ…ありがとうございます！」

急に表情が明るくなり、頭を下げるシャーリー。

そのすぐ後ろでは…

「うう…ふええ…」

上を向いていたヴィヴィオが涙目になる。

「どうしたの？」

「フェイトママ…あれ怖いよお…！」

なんとブイレックスを怖がり、ヴィヴィオが泣き出してしまった。

「…参ったな」

バツが悪そうに頭を掻き、ため息をつく直人。

「だ、大丈夫だよヴィヴィオ！」

スバルが慌ててフォローにまわる。

「…どうして…？」

「ブレイックスはヴィヴィオに、『ボクとお友達になろうよ』って言ってるんだよ！」

「スバル、そもそもアレって男なの？」

必死なスバルに対し、ティアナが冷静なツツコミを入れる。

「…え？そうじゃないの？」

笑顔で首を傾げるスバル。

「僕も男だと思います！だってあんなに格好いいんですよ!？」

「多分男の子かと…」

エリオとキャラは、既にブレイックスを男だと思っているようだ。

「うーん…ああ見えて実は女の子かも…」

少し考えたギンガも口を開く。

「そもそもアイツに性別なんてあんのか？」

「…どうでしょう？」

「ああ…もういい！」

このままではキリがないと考えたのか、直人が謎の議論をストップさせた。

「…それより八神部隊長。ブイレックスの格納場所はどうすればいい？」

直人は改めてはやての方を向くが、彼女は顔をしかめたままだ。

「うん…」

「八神部隊長…？」

はやての顔を覗き込む直人。

すると彼女は直人と目が合うやいなや、突然頭を下げた。

「ごめん直人さん！あんな大きい子置く場所…ここには無いんですよ」

なんと機動六課には広い場所の余裕がなかったのだ。

「…無い？」

「うん…それに聖王教会に、ブイレックスの報告もせなあかんのよ。ごめんな、助けてもらったのに…」

それを聞いた直人は腕を組み、若干俯く。

「参ったな…そうなたらこいつは…」

そう呟きながら、直人がブイレックスを見上げた時だった。

「そのデカい恐竜、ウチで預かってもいいぞ」

直人やはやて達が声のした方を向くと、そこには時空管理局の制服を着用した、一人の中年男性が立っていた。

「ナカジマ三佐！」

そう、彼は陸上警備隊第108部隊の部隊長で、スバルとギンガの父親…ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐である。

「父さん、どうしてここに？」

「おおスバルか。いやさっきのデカい化けモンと、あの恐竜のこと聞きに來ただけだ」

（ナカジマ…三佐？）

二佐のはやてより階級が下のところを見ると、おそらくノンキヤリアであろう。

直人がそんなことを考えていると、ゲンヤが彼の前に歩いてきた。

「昨日六課に来た次元漂流者ってのはお前さんか？中々いい面構えじゃねえか」

「滝沢です。お初にお目にかかります」

自己紹介し、ゲンヤに敬礼する直人。

「ゲンヤ・ナカジマだ。お前さんのことは八神から聞かせてもらった。なんでも“タイムファイヤー”ってのに変身出来るらしいな」

「…はい」

当の直人は、目の前のゲンヤを警戒しているのか、あまり口を開かない。

「おいおい、そうカタイ顔するな」

「ですが…自分としては、三佐殿にブイレックスを預かっていただく理由がありません」

するとゲンヤは静かに笑い、直人の肩を叩いた。

「理由ならある。娘を助けてもらったから、その礼ってことでどうだ？」

「お嬢さん…ですか？」

すると直人の前に、スバルとギンガがやってきた。

「直人さん！ギン姉を助けていただいてありがとうございます！」

二人が直人に頭を下げる。

「気にするなと言ったはずだ。では三佐、本当によろしいのですか？」

「ああ。だが滝沢…ギンガやスバルに手エ出したら…どうなるかわかってんだろうな？」

表情は穏やかだが、ゲンヤの周りには黒いオーラが渦巻いている。

「ちょ、お父さ…三佐！」

若干頬を赤らめたギンガがゲンヤを止めに入る。

「ご心配なく、ナカジマ三佐。そのようなつもりはございません」

表情をあまり変えず、直人はそう言った。

「冗談だ、カタくなるなって。ともかくブイレックスはこっちに任せとけ」

「助かります」

黒いオーラを引っ込めたゲンヤに対し、再び直人が敬礼する。

「じゃ俺は八神に話があるから、またな」

ゲンヤは踵を返し、はやての方へと歩いていった。

「よかったですね直人さん。ブイレックスの居場所が見つかった」
直人に笑いかけるギンガ。

「ああ。だがブイレックスの件といい、ハンカチといい、すまないな」

それだけ言った直人は、一人で隊舎へと戻っていった。

*

「…つたく、ムガインのせいでワイの仕事増えてもうたわ…」

研究室にて、ダリルは白衣と黒いゴーグルを装着し、愚痴を言いながら緑色の液体をかき混ぜていた。

その色はエメラルドグリーンの種類ではなく、石や岩に生えている苔のような濃い色をしている。

「…まあええか。あとどんくらいで完成かわかんけど、これができたらムガインが奪ってきた囚人を使ってテスト…：ハハハ、これでワイらクローンスファミリーの天下や…！」

誰もいない部屋で、ダリルはほくそ笑んだ。

Case File 8 クーロンの陰謀（後書き）

ゲンヤさんの口調が変かもしれませんが（汗）

ちなみに作者は、ブイレックスに性別があるのなら女の子だと思います（笑）

理由は…恐竜形態時の動きが可愛いからですw

Case File 9 直人とヴィヴィオとオムライス（前書き）

PV・ユニークアクセスが16174アクセス、3486人を突破
しました！

本当にありがとうございます！

Case File 9 直人とヴィヴィオとオムライス

ブイレックスが戦力として加わり、陸士108部隊の管轄下に置かれてから数日後。

はやてに呼び出された直人は、部隊長室に赴いていた。

「ごめんな直人さん、急に呼び出して」

「いや別に構わないが。何の話だ？」

直人が問うと、はやては息を整えて再び口を開いた。

「ナカジマ三佐に30世紀のこと話したけど、別によかったやんね？」

「とつくに話した後でよかったかどうか聞くな。まあ三佐なら別に構わないが…」

ため息をつく直人。

「あ、ごめんごめん。構わへんならよかったわ。それを確認したかったんよ。当然やけどめっちゃ驚いてはったわ。後は…」

そう言いながら、はやては机から封筒を取り出し、直人に差し出した。

「はいこれ！」

「それは？」

いきなり封筒を差し出され、疑問を抱く直人。

「昨日の戦闘の特別手当だよ。直人さん、ブイレックス呼び出して頑張ってくれたからな」

「そうか。じゃあ…」

納得したのか、直人は特別手当を受け取った。

「ところで部隊長、この近くにスーパーかデパート無いかな？」

「どっちもクラナガンの都市部にあるけど…何か買い物すんの？」

首を傾げるはやて。

「ちょっとな」

それだけ言い、直人は部隊長室を後にした。

*

正午、直人はいつも通り一人で食堂にやってきた。

特に彼は、大学時代から一匹狼の傾向があるため、仕事以外で他人と一緒にいることは基本的に少ない。

「直人おにいちちゃん!」

声のした方を向くと、なのはとフェイトの二人と共にテーブルに座っているヴィヴィオが、笑顔で直人に手を振っていた。

直人は黙ってポケットに手を入れ、彼女達の方へ歩いていった。

「どうした?」

「ヴィヴィオが滝沢さんと一緒にいいって」

そうなのはが付け加え、椅子をもう一つ用意した。

「…そうか。ところで八神部隊長は?」

「はやてなら、聖王教会に呼び出されてついさっき出発しました」

「なるほどな。どつりで居ないわけだ」

納得しながら椅子に座る直人。

するとヴィヴィオがなのはの膝から降り、直人に駆け寄ってきた。

「おにいちちゃんの隣に座ってもいい?」

「え…？ああ…」

戸惑いつつも、直人は頷いた。

「えへへ、ありがとう！」

ニコニコしながら直人の隣の席に座るヴィヴィオ。

「滝沢さんモテモテですね。ちょっと妬けちゃうな」

そう言うのはだが、彼女の顔はヴィヴィオを優しく見守る母親の表情をしていた。

「そんなことよりずっと気になっていたんだが、ヴィヴィオはあんな達を二人とも“ママ”って呼んでるよな。どういう事情なんだ？」

「あ…」

「それは…」

直人にしてみれば素朴な質問だが、なのはとフェイトは黙り込んでしまった。

「うう…」

同じようにヴィヴィオも口を閉ざし、俯いてしまった。

「そういえば、滝沢さんはご存知なかったんでしたね。数ヶ月前にミッドチルダで起きた、ジェイル・スカリエッティJS事件を…」

＊

「…なるほど。そういうことか」

二人から事情を聞かされ、納得する直人。

なのはが迷子のヴィヴィオを引き取り、フェイトがその後見人になったこと、そのヴィヴィオの正体が“最後のゆりかごの聖王オリヴィエ”のクロン体“聖王の器”であること、聖王となったヴィヴィオが、なのはと激戦を繰り広げた末に敗北し、自分で立って歩いたこと、その後なのはが正式に引き取ったことを…

「そうか…」

ため息をついた直人はスッと手を伸ばし、ヴィヴィオの頭を撫でた。

「お、おにいちゃん？」

少し驚き、直人の顔を見るヴィヴィオ。

「いい母さんを二人も持ったな」

「…うん！」

ヴィヴィオは再び笑顔を浮かべ、それにつられた直人も軽く微笑んでいた。

それは孤高な彼を微かに変えつつあったが、直人本人は全く気づいていなかった。

そんな光景を斜め後ろのテーブルで、フォワード隊の四人とギンガが眺めていた。

「直人さんって無愛想だけど、意外と優しいんだね！」

自身の率直な感想を言うスバル。

「子供にはね。ていうかただのロリコンでしょ？」

だがティアナは、直人に対して未だに不信感を抱いているため、彼への評価が厳しい。

「小さな子って、たまにその人の中身を見抜くことってありますよね」

何かのテレビで見たのか、エリオが思い出すように言う。

「それにしても、ヴィヴィオがあんなに懐いてるなんて……え？」

嫌いな人参と格闘していたキャラが一瞬目を見開く。

彼女の瞳には、スプーンに乗せた一口分のオムライスを、直人に差し出すヴィヴィオの姿が映っていた。

「直人おにいちちゃん、お口あけて！」

どうやら直人に食べさせたいようだ。

「自分で食えるからいい」

そう言い、顔を背ける直人。

「おにいちちゃん恥ずかしいの？あ〜ん！」

だが彼に食べさせる気満々のヴィヴィオは諦めない。

「お願いします直人さん。一口だけで構いませんから」

直人の耳元でフェイトが囁く。

「おにいちちゃん…」

そろそろヴィヴィオの瞳が潤んできた。

「…わかった！わかったから泣くな…」

とうとう観念した直人は、彼女のオムライスを口に入れた。

（八神部隊長が居ない分マシだな…）

そう、はやてが居れば確実にからかわれる上に、弱みを握られることになる。

立場上の上司である彼女に弱みを見せることは彼としても避けたいのだ。

「えへへ、おいしい?」

そんな彼に、ヴィヴィオは満面の笑みを向けていた。

「……はい」

「フン、やっぱりロリコンじゃない……」

ため息をつき、そう呟くティアナだが……

「直人さん……意外と可愛いところあるわね……」

ヴィヴィオにあぐんされ、若干戸惑いの表情を浮かべる直人を見て微笑むギンガ。

「ギン姉、ボーっとしてどうしたの?」

スバルが惚けるギンガの顔を覗き込む。

「……ふえ? な、なんでもないのよ!」

我に返ったギンガは、慌てた様子でカップを手に取り、温ぬるくなった
コーヒーをゴクゴクと飲み始めた。

「…ギン姉？」

姉の行動が理解できず、スバルは首を傾げる。

だが今は貴重な昼休み、目の前のナポリタン大盛りに集中することにした。

「…まいつか！」

*

それから30分後、ヴィヴィオとなのは、フェイトが昼食を済ませたことで直人は解放された。

彼は機動六課を後にし、現在はバスでクラナガン都市部へ移動している最中だ。

（高町さんにフェイト執務官…あれが、前に浅見の仲間が言っていたことなのか？）

『確かに力が必要な。だがそれだけじゃ生きられない』

タイムブルーのアヤセの台詞を思い出す直人。

あの時は特に気にもとめなかったが、機動六課に来てからは何となく解るような気がしていた。

なのはもフェイトもそれなりの地位に居るが、竜也以上に沢山の仲間がいる。

それは、これまで一匹狼を貫き通してきた直人から見ても明らかだった。

（力だけじゃ生きられない、か…）

アヤセの言葉の意味を考える直人を乗せたバスは、ゆっくり都市部へと向かっていった。

Case File 9 直人とヴィヴィオとオムライス（後書き）

独断で恐縮ですが、ヒロインはギン姉とヴィヴィオに決めました！

ご意見、ご感想お待ちしております！

C a s e F i l e 1 0 大恐竜の記憶（前書き）

ゴカイジャーのタイム編…ドモンが全然変わってないわOPが流れるわで嬉し泣きましたw

今回はブイレックスに関するオリジナル設定が幾つか出ます。

Case File 10 大恐竜の記憶

午後一時頃、聖王教会にはカリム・グラシア、クロノ・ハラウン、八神はやての三人が集まっていた。

理由は勿論、直人とブイレックスのことである。

ちなみにヴェロツサは、ユーノと共に別世界への用事で出掛けたようだ。

「この間報告にあったブイレックスロボを調べた結果、色々判ったわ」

最初に切り出したのはカリムだ。

「え…？カリム、どういうこと？」

「単刀直入に言うが、あれはロストログアの類ではない」

カリムの代わりに答えるクロノ。

「なあんや。それならよかった…」

一安心するはやて。

「だがあのロボットのエネルギー源はλ（ラムダ）2000という物質だ。調査の結果、僅かだが時空間を歪める性質があるようだ」

「え…!？」

そのような恐ろしいものが使われていたとは知らず、はやては絶句する。

「これに加えて、それ以上のλ2000を持つ存在が現れない限り、特に問題はない。今回は、滝沢直人の声に反応したブイレックスが時空間を生み出し、ここまで移動してきたと見て間違いないだろう」

そう聞いたはやての脳裏に一瞬、街中で直人を探し回るブイレックスの姿が浮かぶ。

(可愛いような怖いような…ようわからんなあ)

だがそんなくだらない想像はやめ、はやては二人の方を向く。

「とりあえず、今のところは大丈夫そうやね。他に判ったことはない?」

するとカリムが小さく挙手した。

「あと、その滝沢直人さんの出身世界の状態もわかったわ」

そう言ったカリムは一枚のCDを取り出し、はやてに手渡した。

「これがその音声。直人さんも、その世界も…思った以上に深刻な事になっていたみたいね」

「なつてた…?」

過去形が気になったが、とりあえずCDを受け取ったはやて。

その音声はブイコマンダーを通じ、ブイレックスの記録回路に録音されていたものだ。

「二人とも、今日はほんまにありがとうな」

カリムとクロノに礼を言ったはやては、椅子から立ち上がった。

「またいらっしやいね」

*

それから数時間後、はやては機動六課に帰還した。

「おかえりなさいませ、八神部隊長！」

シャーリーが敬礼し、彼女を出迎える。

「うん、ただいま」

はやてはシャーリーに笑顔を向けると、そのまま自室に籠もり、カリムから渡されたCDをプレーヤーに挿入した。

*

《見る！地上全部をあんな風にしたいのか！？》

「……………」

CDを聴き始めて数分…

タイムイエローのドモンの声が響く中、はやては愕然としていた。

（直人さんのおった世界…こないなこと起きてたんや…）

《ブイレックスのパイロットは…2001年の今日、死亡するぞ！》

そう、タイムレンジャーやタツクの話聴いたはやては知ったのだ。

ブイレックスとギエンの激闘により、地上の大半が消え去るという
大消滅…そしてタイムファイヤーが死亡するという未来を…

*

更に数十分後、CDを聴き終わったはやては放心状態だった。

その後ブレックスは敗北し、失脚してシティガーディアンズに戻れなくなった直人は逃走する。

その直後、ゼニットの集団に追われる少女を庇い、重傷を負うが竜也に助けられて避難所へ。

だが先程の少女の文鳥を捕まえる為、外に出たところを背後からゼニットに撃たれ、直人は遂に命を落としてしまう…

彼の意志を受け継いだ竜也や、30世紀から戻ってきたユウリ達の奮闘により、ギエンはネオクライシスごと破壊され、大消滅は回避された。

「…グスッ…」

気がつくと、はやては涙を流していた。

ブレックスとタイムファイヤーの力を持つ直人が簡単に死ぬとは思えなかったし、彼は不器用だが優しい人間だということを改めて知ったのだ。

だがそれ以上に、何故死亡した直人が生き返ってミッドチルダにやってきたのが最大の疑問だった。

「はやてちゃん！どうしたんですか!？」

部屋に入ってきたリインが、涙を流すはやてを見て驚いている。

「あ…ごめんなリイン。何でもないんよ」

涙を拭い、はやては笑顔を見せる。

彼女は直人の過去を、自分の心の中に仕舞うことにした。

無闇に他人に言いふらすことではないし、何よりもはやて自身のシヨックが大きかったのだ。

「はやてちゃん…」

「大丈夫やよりイン。それより、はよ書類まとめよか！」

直人は死亡したが、今はこうしてミッドチルダでピンピンしているし、彼の仇は竜也達が討った。

それに辛いときは、何かしていた方が気が紛れる。

そう考えたはやてはリインと共に、書類整理を開始した。

*

夕方、沢山の紙袋を抱えた直人が帰還した。

「あ、直人さん！おかえりなさい！」

廊下で出くわしたスバルが彼に挨拶する。

「よお」

「袋沢山ありますね。よかつたら手伝いましょうか？」

だが直人は首を横に振る。

「大したことない。そんな暇があつたら腕立てでもするんだな」

そう言つた直人が再び歩き出し、スバルが後に続く。

「何を買ってきたんですか？」

「服を何着か。非番の日までこんな格好でいるのは御免だからな。あと訓練で使えそうな物をいくつか…」

話しているうちに、二人は直人の部屋の前に到着した。

「あ、どうぞ」

スバルがボタンを押してドアを開け、直人が部屋に入って机に荷物を置く。

「悪いな」

「いえ。じゃあ私はこれで！」

「あ、待てスバル」

立ち去ろうとするスバルを引き止める直人。

「何ですか？」

「お姉さん今何処にいる？」

するとスバルは首を傾げ、少し考えて口を開いた。

「多分模擬戦場だと思いますけど…ギン姉に用事ですか？」

「まあな。だが大したことじゃない」

そう言った直人はそのまま自室を後にした。

*

「ハア…ハア…」

模擬戦場にて、ギンガは一人でランニングの最中だった。

そんな彼女の前に、紺色の服を着た男が立っているのが見えた。

「…直人さん？」

「よお」

直人の存在に気づいたギンガが足を止める。

「どうかしましたか？」

ギンガが問うと、直人は何も言わずに小さな紙袋を彼女に手渡した。

「私に…ですか？」

戸惑いつつもそれを受け取るギンガに、直人が頷く。

「ハンカチの詫びだ。じゃあな」

軽く手を振り、直人はその場を立ち去った。

「別に構わないのに…」

そう呟くものの、ギンガはガサガサと袋の中身を取り出す。

「これ…」

彼がギンガに渡したものの…それは彼女の魔法色と同じ、紫色のハンカチである。

「直人さん…」

不器用な直人の背中を見送るギンガ。

そんな彼女の長い髪の間を、夕暮れの冷たい風がすり抜けていった。

*

(ここ…何処なんや…?)

クーロンズファミリーの幹部…ダリルは暗闇の中、一人で立ち尽くしていた。

その正面には全身金色のロボットが立っており、ダリルの方をじっと見ている。

《ヒヤハハハハハ！！》

突然そのロボットは、高笑いをあげながら自身の顔を展開させ、ダリルの方へゆつくりと歩き出した。

「や…やめろや…ギエン…！」

そう、金色のロボットの正体はロンダーズファミリーの幹部、ギエンだ。

狂ったように笑うギエンから逃げようとするダリルだが、足が思うように動かない。

《ハッハハハハハ！！》

カッ…！

その時ギエンの口が光り輝き、ダリルに狙いを定めた。

「うわあああああッ！！」

「…あああッ！？」

研究室の机でうつ伏せに寝ていたダリルが飛び起きる。

「あゝ…またあの夢かあ…」

ダリルはため息をつく、羽織っていた白衣を脱いで椅子の背もたれに引っ掛けた。

(…ミッドチルダに来て、ギエンの奴が夢に出るやなんてなあ…)

どうやらギエンと何らかの因縁があるようだ。

「…まあええわ。とりあえず“これ”は完成したし、明日に備えてはよ寝よ…」

そう呟くダリルの視線の先の机には、緑色の液体入りのボトルが置かれていた。

C a s e F i l e 1 0 大恐竜の記憶（後書き）

ヴェロッサとユーノは居ても居なくても特に影響が無いので出しません。

そしてダリルの過去はいつか書きたいと思います！

C a s e F i l e 1 1 母の形見と兄の面影（前書き）

未だに直人特有のコツコツ（DVディフェンダーの銃身を手の甲に
当てるやつ）が出来てない…

今回はオリキャラが一人（敵サイドを含めると二人）出ます。

Case File 11 母の形見と兄の面影

翌朝、食堂にて直人は相変わらず一人で食パンをかじっていた。

周りの局員達はそんな彼を何度かチラッと見ている。

「またお一人なんですね」

直人が顔を上げると、朝食のプレートを持ったギンガが笑顔で彼の顔を覗き込んでいた。

「…お前か」

「はい。ここいいですか？」

そう尋ねるギンガだが、直人が返答する前に椅子に座って食べ始めた。

（姉妹って似るもんだな…）

直人はつくづくそう思った。

「……で、何か用か？」

「はい」

返事したギンガは懷から、直人に貰った紫色のハンカチを取り出し

た。

「これ、ありがとうございました。大切にします」

「いや。俺が悪かったからな」

バツが悪そうに俯く直人。

「いいえ。ですから、これ差し上げます」

そう言っただけで彼女が黄緑色のハンカチを取り出し、直人に差し出す。

そのハンカチにはうつすらと血の跡が残っており、あの時彼の額を拭いたものに間違いはなかった。

「あ、ああ……」

少し戸惑いつつも、直人はギンガからそのハンカチを受け取った。

「そして私が、直人さんに貰ったこれを使います。こうすれば万事解決です」

紫色のハンカチを懷に仕舞うギンガ。

「そういうことなら遠慮なく」

そう言った直人は黄緑色のハンカチを胸ポケットに仕舞うが、そのハンカチに「クイント・ナカジマ」という名前が刺繍されていることには気がつかなかった。

「もう直人さん、ほっぺにバターついてますよ」

ギンガが苦笑いしながら、ナプキンを手にとって直人の口元へ近づけた時だった。

バツ！

焦った表情を浮かべた直人はギンガからナプキンを奪い取り、自らの口元をゴシゴシと拭き始めた。

「何のつもりだ？」

「え、私は拭こうとしただけですよ？」

相変わらず笑顔のギンガだが、直人はため息をついて椅子から立ち上がった。

「…俺はそろそろ行く。訓練の準備があるからな」

それだけ言い、直人は食器を返却口まで片づけに向かった。

*

そして午前九時、模擬戦場にスバル、ティアナ、エリオ、キャロが

集まって……

……いなかった。

（あいつら……揃ってエスケープか？）

一瞬そう思ったが、向かいの植木の前でその四人がしゃがみ込んでいるのが見えたので、直人は彼女らのところまで歩いていった。

「何をしている？もうとつくに時間は過ぎてるぞ」

するとエリオが振り返り、直人に頭を軽く下げた。

「すみません直人さん！でも……」

「何があつたんだ？」

エリオの後ろから、直人が地面を覗き込む。

「……なるほどな」

ある物を目にした彼は納得した。

その正体は木から落ちたのか、地面でうずくまっている雀スズメの雛である。

「キャロ、タオル持ってきて！早く保護を…！」

「いや、その必要は無い。放っておけ」

ティアナの台詞を遮るように、直人が口を開いた。

「ど、どうしてですか！？このままじゃ死んじゃいますよ！」

スバルが直人の腕を掴んで問いたです。

「滝沢さんって…意外と冷たい人だったんですね。目の前の小さな命も救わないなんて…」

直人を批判するティアナだが、彼は呆れたようにため息をついた。

「…雀は野生の生き物だ。下手に人間が手を貸すと、自然界に帰れなくなる。それに野鳥は厄介な細菌を沢山抱えてるから、無闇に触るな」

「え…そうなんですか！？」

驚いた様子のスバルとティアナ。

無理もない、二人とも野鳥の習性を知らないのだ。

「一時の情だけで手を出すな。放っておけばその内、親鳥が迎えに

来るから安心しろ」

「へえゝ…それならよかったあ…」

すっかり安心し、スバルは大きなため息をついた。

「直人さん、詳しいんですね」

雀の知識を持つ直人に尊敬の眼差しを向けるキャロ。

「以前文鳥を飼ってたことがあってな。小鳥のことは一通り覚えたつもりだ」

「ほう。君、中々の知識人だな」

背後から聞こえた声に反応し、一同が振り返った先には一人の中年の男が立っていた。

「…ギブソン少将！」

スバルが慌てて敬礼し、他の三人も敬礼した。

（少将、か…）

かなり上の階級が気になりつつも、直人もギブソンと呼ばれた男に敬礼した。

「やあスバル。元気か？」

「はい！少将もお変わりないようで！」

親しい様子で二人は握手を交わし、スバルが直人の方を振り返った。

「直人さん、ご紹介します。こちらは父の友人で、スペンサー・ギブソン少将です」

するとスペンサーは直人の前まで歩いてきた。

「スペンサー・ギブソン、地上本部所属だ。今スバルが言ったように、ナカジマとは長い付き合いだね。君がタイムファイヤーの……」

「はい。滝沢です」

直人がスペンサーに軽く会釈する。

「いやあ、一度君に会ってみたかったんだよ。またいつか話をしよう」

それだけ言い、スペンサーは手を振りながら隊舎の外へ姿を消した。

「……すっかり時間を食ってしまったな。さ、始めるぞ」

「はい！」

スペンサーを見送った直人とスバル達が踵を返して歩き始める中、ティアナだけは俯きながらその場で立ち尽くしていた。

「ティア、どうしたの？行くよ」

スバルが声をかけたと同時に、ティアナは顔を上げて直人の方を向いた。

「滝沢さん……すみませんでした！」

直人が振り返ると、彼に頭を下げているティアナの姿があった。

「私……野鳥のこと何も知らないで、滝沢さんのこと最低って決めつけて……これじゃ……！」

（兄さんを中傷した上官と……同じじゃない……！）

殉職した兄、ティードを想うティアナ。

何も知らずに特定の個人を批判することは、かつて兄を中傷した心無い上司と変わらない……彼女はそう感じていた。

「……フツ」

だが直人は静かに笑い、赤いベレー帽を被った。

「……気にするな。それより訓練始めるぞ」

「はい……」

小さな声で返事し、ティアナは直人の後に続いて歩き出した。

こうして二人の心の溝が僅かに埋まった。

だが新たな火種は、すぐ近くまで迫ってきていた。

*

ここはミッドチルダ某所、クローンスファミリーのアジト。

たった今、一人の囚人が解凍されたところだ。

「…あゝ、かつたりいな」

そうばやきながら、亀に似た怪人がダリルの前に姿を現す。

「やつぱ圧縮冷凍ってヤツは辛いなあ」

それもそのはず、圧縮冷凍されている時は、頭は半分起きていて身体は全く動かせないのだ。

「せやろうな。でも今回は機動六課っちゅうところで暴れてきてくれや。別に何人殺してもええで」

「いいのか？よっしゃあ！」

ガッツポーズをとる彼の名はフランシィ。

無差別通り魔の犯人で、圧縮冷凍30年の刑を言い渡された男である。

「早速で悪いんやけど、これ飲んでみてくれるか？」

緑色の液体入りのボトルをフランシイに手渡すダリル。

彼はそれを受け取ったものの、飲むのを躊躇している。

「な…なんか毒々しくないか？これ…」

「しゃあないやろ！それ飲まな時空管理局を完封出来へんねん！はよ飲めや！」

「わ、わかったよ…」

ダリルの物凄い剣幕に気圧され、フランシイは仕方無く緑色の液体を飲み干した。

「うえ…甘ッ…」

「当たり前や、ガムシロップ五つ入れたからな。ともかく、それで敵の攻撃効かんから安心やで」

ドヤ顔をかますダリル。

よほど自分の作品に自信があるようだ。

「…おお、とりあえず行ってくるぜ」

しつこい甘さにうんざりしながらも、フランシはアジトを後にした。

「ま、あの“赤い奴”に勝てるかどうかはわからんけどな…」

*

さて、そのような恐ろしい奴が迫っていることなど知る由もない機動六課サイド。

正午に訓練が終了し、昼休みとなった。

「「ありがとうございます！」」

「じゃあ解散だ」

そう言っただけを返した直人の腕を、スバルがガシツと掴んだ。

「直人さん！一緒に昼ご飯食べましょうよ！」

「いい。飯ぐらい一人で食わせろ」

「そんなこと言わないで、聞きたいこともありますし。さあさあ！」

そつぽを向く直人を余所に、スバルは半ば強引に彼を引っ張っていた。

「スバルさんと直人さん、兄妹みたい…」

「そうだね…」

そんな二人を呆然と見送るエリオとキヤロ。

確かにそれは、無愛想な兄を連れ回す無邪気な妹のようにも見える。

（兄さん、か…）

性格は正反対だが、ティアナは年が近いティードと直人を重ねていた。

Case File 11 母の形見と兄の面影（後書き）

スズメの生態はググりましたが、間違いがあるかもしれません。

ようやく直人が鳥好きという設定を活かせてよかった…w

Case File 12 襲撃！（前書き）

今更ですが、全てのサブタイトルに「Case File」を付けることにしました！

直人「本当に今更だな。相変わらずおめでたい作者だ」

（・ω・）

Case File 12 襲撃！

あの後、結局直人はスバルを始めとするフォワード陣にギンガを加えた、計五人と休憩する羽目になった。

そして現在に至る。

「そついえば直人さんってアニメとか観ますか？」

唐突に話し掛けてきたのはエリオだが、何故話題がアニメなのか：

「まあ、子供の頃は観てたがな。それがどうかしたのか？」

「僕かなり面白いの知ってるんですよ！あ、あのCMです！」

そう言ったエリオは、食堂の天井に設置されてあるテレビを指さした。

《I am 忍者 of 忍者！》

その決め台詞から始まった番組CMには、緑と金色を中心とした忍者服を着た青年が映っていた。

《数々の難事件に、拙者が挑む！【探偵忍者ゴールドワン】今夜7時放送！この謎…必ず解いてみせる。名探偵と呼ばれた、御前様の

名にかけて!』

「……アレ忍者の必要あるのか?」

ゴールドワンのCMを眺めていた直人が放った第一声は、エリオにとっては少々残酷なものだった。

「な…も、勿論ですよ! 忍者の素早い動きで、犯人を捕まえたりするんです!」

必死で力説するエリオ。

「…わかったから飯食わしてくれ」

「あ、すいません。つい熱くなってしまって…」

我に返ったエリオが苦笑いする。

「でもエリオ、私はゴールドワン面白いと思うよ!」

親指を立て、エリオに笑いかけるスバル。

「スバルさん…!」

ガシッ!

「ゴールドワンのようになりたいんなら、ちゃんと身体鍛えるんだ

な」

カタい握手を交わす二人に対し、直人はそう伝えたとラーメンを啜った。

「そういえばギンガさん、そんなハンカチ持っていましたっけ？」

ギンガの前に置かれた紫色のハンカチに目をやるティアナ。

「これ？昨日直人さんに貰ったの」

その発言を皮切りに、スバルがニヤリと笑いながら直人の方へ顔を向けた。

「……なるほど。直人さん、まさかギン姉に気があるんですか！？」

「……は？」

「え……！？」

不意をつかれ、一瞬直人とギンガの動きが止まる。

「俺がギンガのハンカチを汚してしまったからな。その詫びだ」

「……」

そうはつきりと答える直人だが、ギンガは顔を赤らめたまま黙り込んでいる。

「滝沢さんって意外と律儀なんですね。知りませんでした」

当然ティアナはあまりいい顔をせず、本音を交えた嫌味な一言をさり気なく呟く。

「ティアさん、失礼ですよ…」

キヤロがティアナを窺めるが、当の直人はフンと鼻で笑っている。

「律儀なものか。俺は力を追いつけるだけの人間だ」

「そんなことない。直人さんは優しい人やよ」

突如、別方向から聞こえた声に反応し、一同がそちらを向く。

「八神部隊長！」

そこには複雑そうな表情を浮かべたはやてが立っており、直人の目をじっと見つめていた。

「部隊長、あんたに俺の何がわかるんだ？」

「あ…そ、それは…」

無闇に口を挟んだことを若干後悔するはやて。

本人の承諾も無しに、彼の過去をべらべら喋るわけにはいかないのだ。

「せやから…直人さんは…！」

ジリリリリリ！！

「…！？」「」

タイミングが良いのか悪いのか、その時六課隊舎内全域に非常ベルが鳴り響いた。

「この警報は…襲撃や！」

「しゅ、襲撃！？」

ドガアアアン！！

さらに模擬戦場からの大きな爆発音に混じり、人の悲鳴が聞こえてきた。

窓の外には、局員達を袋叩きにするゼニツトの大群が見える。

直人はすぐさま立ち上がって辺りを見渡し、その場の局員達にも聞

こえる程の大声で指示を飛ばし始めた。

「総員フル装備！フォワード隊は非戦闘員を安全な所へ避難させる！それ以外は出動だ！急げ！！」

「はい！！」

スバル達は返事すると、調理師達や事務員達の避難誘導しながら食堂を後にした。

ギンガや他の局員達も、慌てた様子でバタバタと飛び出していく。

「高町さんとフェイト執務官は？」

「もう迎撃に出たって今報告があったよ！」

はやてが直人にそう答える。

（誰もヴィヴィオについてないのか…！？）

ヴィヴィオの笑顔が直人の脳裏をよぎる。

戦闘員が彼女の側に居ないとすればかなり危険である。

「…八神部隊長、後の指示は任せた！」

ダッ！

「あ、直人さん待って！」

はやての呼び止めも聞かず、直人は駆け出した。

*

「クローンス…！」

「フェイトちゃん、油断しちゃ駄目だよ！」

一方外では、なのはとフェイトが一人の怪人と対峙していた。

それは先程解凍されたフランシィであり、彼は余裕の表情を浮かべていた。

「お前らが機動六課のエースか。ダリルの薬の効果を試す実験台になってもらうぞ！」

（同時にいくよ、フェイトちゃん！）

（うん！）

なのはとフェイトは互いに頷くと、フランシィと距離を取った。

二人ともデバイスを構え、彼に向けている。

「エクセリオン……バスターー！！！」

「トライデント……スマッシャーー！！！」

ゴオオオオオオ……！！

ドガアアアン！！

二人の大技はフランシィに直撃し、爆発を起こした。

だが……

「……何なんだ今のは？」

なんと爆風の中から、何事もなかったかのようにフランシィが現れたのだ。

「「な…!?!」」

二人とも焦りの表情を浮かべ、戦慄していた。

「ど…どうしようなのは、私達の攻撃魔法が…!」

「効かない…!?!」

そう、エクセリオンバスターとトライデント・スマッシャーを同時に食らったフランシイだが、彼は平然としていた。

「なあんだ、『管理局を完封』ってこういう意味だったのか!こいつはいいぜ!」

そう、ダリルが作った薬は魔導師や局員が使う攻撃魔法を、全て無効化するという恐ろしいものだった。

しかもフランシイは亀がモチーフなこともあり、動きは遅いが並の攻撃ではびくともしない硬い装甲を持つ。

それに攻撃魔法を無効化させる薬が加われば、鬼に金棒とはこのことである。

「オレは最強だああああ!」

ズキン!!

フランシイの口から青い光線が発射され、なのはとフェイトを襲った。

「きゃあああああ！！！！」

*

丁度その頃、ヴィヴィオは寮母のアイナと共にスバル達との合流を急いでいた。

「頑張つて！もうすぐで安全だから！」

「うん…！」

だが運悪く、五体のゼニットと出くわしてしまった。

「ああっ！」

驚きつつも、アイナはヴィヴィオの正面に回り込んでゼニット達と向かい合った。

自らを犠牲にし、ヴィヴィオを逃がすつもりだ。

ジャキッ…！

目をギュッと瞑るアイナ。

彼女に銃剣をに向けたゼニット達が、引き金を引こうとした時だった。

「はあッ！」

ガンッ！！

突如、ゼニットが一体倒れ込んだ。

そこには直人が立っており、右拳を握り締めていた。

「直人おにいちゃん…！」

ヴィヴィオとアイナが安堵の表情を浮かべる。

「滝沢、助太刀するぞ！」

そう言って現れたのは、犬の耳と尻尾を持つ筋肉隆々の男…

「…ザフィーラか」

実はこの二人、言葉を交わすのは今回が初めてなのだ。

「ふん！」

バキッ！

ドガッ！

ザフィーラはゼニット四体を次々と殴り倒し、直人の方を向いた。

「外に大物がいる。二人は我に任せて、お前は行け」

「…ああ、助かる」

被っていた赤いベレー帽を脱いだ直人は、左腕のブイコマンダーを口元に近づけた。

「タイムファイヤアッ！！」

彼はタイムファイヤーに変身すると、手に持っていたベレー帽をヴィヴィオに手渡した。

「おにいちゃんの帽子、大きいね！」

ベレー帽を受け取ったヴィヴィオがタイムファイヤーに笑顔を向ける。

「ザフィーラの言うこと聞くんだったぞ」

コクンとヴィヴィオが頷く。

タイムファイヤーはそんな彼女の頭を撫で、その場から走り去っていった。

Case File 12 襲撃！（後書き）

探偵忍者ゴールドワンのCVは、当然ながら松野太紀さんですw
ようやくザフィーラを、ヴォルケンを全員出せてよかった…

C a s e F i l e 1 3 繋がる信頼（前書き）

今回、直人とティアナの心に変化が生まれます。

そしていつもよりちょっと長めです。

Case File 13 繋がる信頼

一方なのはとフェイトは、大苦戦しつつもフランシィと戦っていた。

「へへへへ！お前らの攻撃は一切効かねえって言うてんだろぅが！
」

ズキユン！！

「きゃあああ！」

「うああッ！」

光線を受け、地面に倒れ込んだ二人のバリアジャケットはボロボロな上、ダメージも大きい。

なのはとフェイトにじりじりと迫るフランシィは、パカッと大きな口を開けた。

「もう飽きたな。そろそろ死ねえ！！」

バチバチッ！！

「ぎゃあああ!？」

突如、数発の赤い閃光が空を駆け、フランシイを襲った。

「あいてて…何者だ!？」

突如の襲撃に驚き、周りを見回すフランシイ。

それはなのはやフェイトも同じだった。

「……!」

その時、フェイトの動きが止まった。

「フェイトちゃん、どうしたの？」

「なのは…今何か音が聞こえなかった？」

そう言うフェイトは両耳に神経を集中させ、周囲を探る。

すると何処からか、何かを叩くような音が一定のリズムで聞こえてきた。

コッン…

コッソッソ…

コッソッソ…

「なッ…！」

上を見上げたフランシィは絶句する。

コッソッソ…

「貴様は…！？」

なのはとフェイトも、フランシィが見たものにようやく気がつく。

「あれは…！」

二人の表情に希望が戻る。

そう、隊舎の屋上で手すりにもたれながら、D.V.ディフェンダーの銃身をコッソコッソと左手の甲に当てる真紅の戦士――

「…タイムファイヤーを忘れていたか」

咄然とするフランシィを余所に、タイムファイヤーは屋上から飛び降りた。

「りゃあッ！」

スタツ！

「直人さん！」

着地したタイムファイヤーに駆け寄るなのはとフェイト。

「助かりました滝沢さん！あのクローンズ、攻撃魔法が効かないんです！」

なのはがそう説明するが、彼はあまり驚いていない。

「そうか。とうとう来たか……」

「え？」

「……いや。俺があいつをどうにかする」

そう言いながら、タイムファイヤーはDＶディフェンダーをフランシィに向けた。

「DＶディフェンダー……！」

ズキュン！ズキュン！

DVバルカンは今弾命中するが、フランシイの甲羅には傷一つ付いてない。

「ハハハハハ！そんなもんオレに効くかよ！！」

「なら！DVチェンジ！ディフェンダーソード！！」

ジャキッ！

格闘戦に持ち込もうと考えたタイムファイヤーは、ディフェンダーソードを携えてフランシイに斬りかかる。

「はあッ！」

ガキインッ！！

咄嗟に後ろを向いたフランシイは、ディフェンダーソードの斬撃を甲羅で防ぐ。

「なにッ…？」

「フハハハハ！どうやらその力は魔力じゃなさそうだが、オレに勝

てるものか!!」

振り返ると同時に、フランシィがタイムファイヤーの顔面にラリアットをかます。

バシッ!!

「ぐああッ!!」

それをまともに食らい、タイムファイヤーは軽く吹き飛ばされる。

「滝沢さん!!」

なのはが叫ぶが、今の彼女には何も出来ない。

ドンッ!!

隊舎施設の壁に叩きつけられ、彼は力無く地面に落ちる。

「う...あぐッ...」

「意外としぶといな。まあいいや、機動六課のエース二人の前にデメエから殺してやる!」

そう言い放ったフランシィが再び口を開けた、その時だった。

「滝沢隊長を援護するぞ！撃て撃てえ！！」

バシユッ！！

ビュン！ビュン！

突如、フランシイに向けて無数の魔力攻撃が放たれた。

それは先程の食堂で、直人の指示を受けた武装局員達だった。

ゼニットを排除し終え、隊長陣の援護に駆けつけたのだ。

「ああ痛くも痒くもねえぜ！！」

相変わらず涼しい表情で攻撃を受け止めるフランシイだが、局員達の狙いは違った。

「今ですギンガ陸曹！」

「はい！」

局員達が攻撃を中止すると同時に、彼らの後ろからギンガが飛び出した。

彼女はブリツツキヤリバーでフランシィとの距離を詰め、リボルバーナックルで装甲の薄い頭部を叩くつもりなのだ。

「はああああッ!!」

ガァアアァン!!

「な…!!」

リボルバーナックルはフランシィの頭部に命中……………しなかった。

「今の、ちょっとはマシな攻撃だな」

ニヤリと笑うフランシィは、リボルバーナックルを右腕で受け止めていた。

「だが…まったく効かねえぜ!!」

バキッ!!

タイムファイヤーと同じように、彼はギンガを殴り飛ばした。

「ギ…ギン姉!!」

避難所の部屋にて、合流したヴィヴィオに付き添うスバルが窓の外に向かって叫ぶ。

彼女は地面に叩きつけられる姉に釘付けになっていたため、同じく非戦闘員の護衛担当のティアナが飛び出していったことには気づかなかった。

「う…うう…」

痛みをこらえながらも立ち上がるギンガ。

幸いダメージ自体は大したことはなかったが、彼女の右腕の肌がえぐれ、その中から機械が覗く。

それこそ、ギンガが戦闘機人であることを証明していた。

「…お前、機械人間かよ! まったくお笑いだぜ! ヒヤハハハハ!」

「…!」

ギンガを嘲笑うフランシイ。

他の者達は彼女の心情を察したのか、皆絶句していた。

「く…！」

当のギンガ本人も、屈辱的な言動に対して黙り込んでしまった。

「おいタイムファイヤー！お前こんな得体の知れない奴とよく組めるなあ！同情するぜ、ハハハ！」

「……た」

小声で何かを呟くタイムファイヤー。

「…ああん？」

「だからどうした？」

そう、タイムファイヤー…いや直人は赤い仮面の下で、ギンガを侮辱したフランシィを睨みつけていた。

しかも彼はギンガの秘密に驚くどころか、全く動じていない。

「な…なにイ！？」

「ギンガはギンガだ。身体が機械だろうが何だろうが、そんなこと俺には関係無い」

「滝沢さん…」

物陰から状況を見守っていたティアナが驚く。

正直言つと彼女は、直人もフランシと同じような考えの持ち主であると思い込んでいた。

(…八神部隊長の言った通りだ…やっぱり滝沢さんは…)

*

「直人さん…」

スッ…

フラフラとよろけるギンガに肩を貸すタイムファイヤー。

「しっかりしろ」

「でも…直人さん、私の身体…本当に、気持ち悪いって思わないんですか…？」

恐る恐る問うギンガだが、直人の考えは変わらない。

「どんな事情があるのか知らないが、俺はお前に対する態度を変えるつもりは無い。何度も言わせるな」

そうきっぱり言い切る直人だが、それには以前の出来事が引っかけられているからだった。

(…俺が言えたことじゃないがな)

*

『直人！何故その囚人に固執する！？』

『契約者の財産を脅かした以上は当然だ。それが俺達、“シティガーディアンズ”の使命だからな』

かつてシティガーディアンズに在籍していた頃、ロンダー囚人のD・ラデスを始末しようと出動した彼の前に、一人の少年が立ちはだかった。

『そんな怪物この世から…排除してやる！！』

するとその少年はこちらをまっすぐ見据え、口を開いた。

『怪物ですって…？そんなの変です！』

そう、タイムグリーンのシオンである。

彼は、偶然出会ったD・D・ラデスが罪を償いたいと考えていることを知り、共にロンダースファミリーとシティガーディアンズから逃げ回っていたのだ。

『見かけが、地球人と違うからって…撃つんですか？生きる権利を奪うっていうんですか！？彼らから見たら…銃を構えて立つあなたの方が……よっぽど怪物です！…』

*

あの時と状況は全く異なるが、シオンの言葉は今でも直人に大きな影響を与えていた。

あれ以降、彼はロンダー囚人を一度も殺そうとせず、また怪物呼ばわりすることもなくなった。

「ハン、くだらねえ奴らだぜ！いい加減くたばっちまえ！！」

逆上したフランシィが再び拳を振り上げた時…

「させない！！」

突如ティアナが物陰から飛び出し、フランシィに向けてクロスミラー
ージュを乱射し始めた。

「はあああああ！！」

ズキュン！ズキュン！ズキュン！ズキュン！ズキュン！

「ぐお…！？」

両腕で目を防御するフランシィだが、ティアナは攻撃を止めない。
要するに足止めである。

（あれ…？今、いつもより身体が軽くなったような…）

ふと一瞬、自らの動きを気にするティアナ。

直人の訓練の成果がようやく現れたのだ。

「よ…よし！もう一度だ！撃てえ！！」

バシュッ！バシュッ！

ティアナに触発されたのか、再び一斉射撃を開始する武装局員達。

「…今です滝沢さん！ギンガさんは私に任せて、早くアイツを…！」

タイムファイヤーに代わり、ギンガに肩を貸すティアナ。

「…了解。DVチェンジ！ファイナルモード…！」

ウン…！

ディフェンダーソードが青色に輝き、タイムファイヤーが走り出す。

同時にティアナと武装局員達も攻撃を止めた。

「…やああッ！」

ズシャッ…！！

「ぐわああああッ…！」

ファイナルモードの斬撃を受け、フランシィが怯んだ隙をタイムファイヤーは逃さなかった。

「DVリフレイザーー!!」

ズシャアッ!ズシャアン!

タイムファイヤーはフランシィをX字形に斬りつける。

「ぐはッ!おおああああッ!!」

DVリフレイザーの圧縮冷凍作用が働くが、フランシィは最後の力で自らの腰に手を伸ばす。

「圧縮冷凍なんざ…されてたまるかああッ!!」

ペリッ!

抑制シールを剥がすことに成功した彼は、みるみるうちに巨大化し

リバウンド

ていく。

「しまった…！」

舌打ちするティアナだが、タイムファイヤーはブイコマンダーに向かって叫ぶ。

「来い！ブイレックス…！」

*

その頃…

《グオオオオン…！》

陸士108部隊本部より、ブイレックスが駆け足で出動した。

「ナカジマ三佐、ブイレックスが出動しました！」

部隊長室のゲンヤに、女性局員が報告する。

「またデカい敵が現れたのか…」

ゲンヤはため息をつきつつも、モニター越しにブイレックスの背中を見送った。

（…八神達を助けてやってくれよ！）

*

『ぜってえ許さねえぞデメエらあッ！！』

カパッ！

ズキユン！！

巨大化したフランシィは口を開け、足元のタイムファイヤーや局員達に青い光線を放つ。

ドガアアアン！！

「「うわああ！！」」

地面で爆発が起き、全員が吹き飛ばされる。

『ハハハハ！よおし、次は…これだ！』

次にフランシイが目をつけたのは、なんと機動六課の避難所だった。

そこには非戦闘員は勿論、護衛担当のフォワード隊やザフィーラ、シャルがいる。

「スバル達を守らなくちゃ…！」

「危険ですGINGAさん！」

フラフラの状態で避難所に向かおうとするGINGAだが、ティアナに止められる。

「でも…！」

「今は、滝沢さんを信じましょう！」

とうとうティアナも、直人に信頼を寄せ始めたのだった。

*

さて、非戦闘員といえども職務を放棄しないのが通信士。

シャーリーを始めとする通信士達は、はやてとグリフィス指揮下のもとで管制室に残っていた。

「八神部隊長！九時の方向から何かが来ます！」

シャーリーがモニターを凝視しながら、キーボードを叩く。

「これは…ブイレックスさんです！」

*

「まずいです！皆早く逃げてください！」

こちらへ向かってくるフランシに気づいたエリオが、非戦闘員達に向かって叫ぶ。

だが、間に合わないことは目に見えていた。

『…潰れるおっ…！』

フランシが足を上げ、避難所を踏み潰そうとした時だった。

《グオオオオン！！》

ガツンッ！！

そう、遂にブイレックスが到着したのだ。

『わああああ！！？』

ドオオン！！

彼が片足を上げた状態のフランシと激突し、これを転倒させたのだ。

「やったあ！ブイレックスだ！」

「「おおおお！！」「」

エリオを始め、避難所の全員がブイレックスの登場を心から喜んだ。

「ほらヴィヴィオ、怖くないよ」

スバルが窓の外にいるブイレックスを見ながら、ヴィヴィオにそう語りかける。

当のヴィヴィオも、窓越しにブイレックスをじっと見つめている。

「あれ、こわく…ない？」

「うん！だってブイレックスは…ヴィヴィオやこの皆、それになのはさん達を守るために来たんだよ！」

*

その頃外では、タイムファイヤーがやや早口で指示を飛ばしていた。

「ブイレックスで奴を引きつける。お前達は負傷者を連れて避難しろ！」

「了解！滝沢隊長！」

敬礼した武装局員達が、なのはとフェイトに肩を貸す。

「お前達も行け！」

「了解です！」

コクンと頷いたティアナは、ギンガと共に避難を開始した。

だがそれと同時に、フランシィがよろよろと起き上がったのだ。

「まずいな…ブイレックス！アタック！！」

タイムファイヤーの指示で、ブイレックスがフランシィの右腕に噛みついた。

『ぎゃあああああ！！』

湾岸地区に、フランシィの悲痛な叫び声が響く。

『…オラアアアアッ！！』

ガンッ！！

腕に噛みついたブイレックスを引き離すべく、フランシィは左手で彼の頭を殴った。

《グオオオオン！！》

殴られたブイレックスはフランシィの腕を離してしまったが、タイムファイヤーは特に焦っていない。

「よし、レックスレーザー！！」

ズキュウウウン！！

ブイレックスの両肩の砲台から、赤色のビームが発射される。

それはフランシイの腹部に直撃し、彼の装甲にヒビが入った。

『アゝアゝアゝアゝッ！！いでええええ！！』

「少々乱暴で悪いが、折角のチャンスは利用させてもらっ

そう言ったタイムファイヤーは、ブイコマンドーの「V」ボタンを押す。

「ボイスフォーメーション！ブイレックスロボ！！」

フランシイが腹部を押さえて悶え苦しむ隙に、恐竜形態のブイレックスがみるみるうちにロボット形態に変形していく。

『ゼエ…ゼエ…やりやがったなクソツタレエ！殺してやらあ！！』

「その前に少し頭を冷やせ。レックスパンチ！！」

するとブイレックスロボの左拳がロケットパンチのように発射された。

バキィッ！！

レックスパンチはフランシイの腹部に直撃し、彼を海の中へ叩き落とした。

「がぁぁぁアッ！！」

ザバァアアアン！！

「フン、目が覚めたか」

だが…

ズシュッ…！

海の中から青い光線が発射され、ブイレックスロボの胸部にヒットした。

その破損部からは火花が飛び散っている。

（どうやら急いだ方がよさそうだな…！）

そう判断したタイムファイヤーは、「F1」のボタンを押した。

ピッ！

「マックスブリザード!!」

やや前屈みになったブイレックスロボはよろけつつも、マックスブリザードを放ち、海から顔を出したフランシィの動きを止めた。

『し、しまっ…冷てええええ!!』

「ジ・エンド!」

タイムファイヤーの決め台詞と同時に、圧縮冷凍作用によって15cm程まで縮むフランシィ。

今の彼は、まるで捨てられたキューピー人形のように海面でプカプカと浮いていた。

パシッ!

何処からか突如ヴィータが現れ、そんなフランシィを拾い上げた。

彼女はそのまま、タイムファイヤーの前までやってきた。

「なあ滝沢、こいつ小さくなったけど…死んだのか？」

ヴィータはタイムファイヤーの足元に、フランシィを乱暴に放り投げた。

「いや。これは圧縮冷凍だ」

彼はそう言い、フランシィにエンブレムをかざす。

するとカプセルが出現し、自動的にフランシィを収容した。

「圧縮冷凍？なんだそれ？」

「殺さず逮捕する方法だ」

カプセルを拾い上げると同時に、タイムファイヤーの変身が解除される。

「ま、ここまで運んでくれたおかげで助かった。海に飛び込まずに済んだからな」

ヴィータに礼を言った直人は、彼女に背を向けて避難所へと向かっていった。

こうして直人達はフランシィを鎮圧し、機動六課の防衛に成功した。だが十数人の局員に加え、隊長のなのはとフェイトが負傷した為、

一時的に戦力が傾いてしまった。

Case File 13 繋がる信頼（後書き）

ブイレックスは六課局員（主にエリオとキャロ）にとって英雄ですw
それはそうと、やはりラデスとシオンの回はタイムレンジャーで五本の指に入るほどの神回だと作者は思います。皆さんはこの回がお好きでしょうか？

C a s e F i l e 1 4 自分達の明日（前書き）

明けましておめでとうございます！
今年もよろしく願います！

ちなみに作者は、水樹奈々さんが「真紅の同志 タイムファイヤー
のテーマ」を歌ってくださる初夢を見ましたw

「フランシスが失敗しただと？」

クーロンズファミリアジトにて、ボスがダリルに問う。

「そうみたいやなあ。でもあいつ、かなり貢献してくれたで。薬の効果を証明してくれたし、あのエース・オブ・エースを負傷させたやん！」

「それだけでは駄目だ。我々が時空管理局に取って代わるためには、もっとあの薬を作る必要がある」

するとダリルはニヤリと笑い、中身が入ったボトルを二本取り出した。

「ちゃんと作ってるって。でもこれをどうやったらもっと凄いの作れるか、やねんなあ……」

ボトルの中身をじつと見つけ、考え込むダリル。

そんな彼を見ていたボスは、軽いため息をついた。

「お前は本当に研究が好きだな」

「当たり前やがなボス！あんたがワイを拾ってくれへんかったら、こんな思っ存分研究出来ひんかってんから！それはそうとボス、今から何日か研究室に籠もるから入らんとってや」

ボトルをポケットに仕舞うと、ダリルは研究室に入っていた。

「ボロボロだったあいつがあれほど元気になるとはな…」

ダリルが入った研究室の扉を見つめ、ボスはそう呟いた。

*

「さてと…」

フランシィ逮捕直後、避難所前に到着した直人は扉を開けた。

シュン！

避難部屋の中には非戦闘員全員と、その護衛の局員が数名いた。

「あ！おにいちゃん！」

直人の姿を見るやいなや、ヴィヴィオが彼に駆け寄ってきた。

「これ、かえすね！」

そう言った彼女は、手に持っていた赤いベレー帽を直人に差し出し

た。

「ああ」

彼はヴィヴィオから帽子を受け取り、それを被った。

「直人さん！」

そんな光景を見ていたスバルとエリオ、キャロ、ザフィーラも直人の前にやってきた。

ちなみに今のザフィーラは犬の姿をしている。

「直人さん、現状は？」

「負傷者は現在、医務室に移動中だ。ギンガは身体のことであって、クラナガンの医療センターに搬送された」

「え！？」

姉が負傷したことを知り、動揺を隠せないスバル。

「心配するな。今はティアナが付き添っている。見たところ特に異常は無さそうだ」

「ホントですか！？よかったあ……！」

一安心したスバルは安堵のため息を漏らす。

「それより直人さんは、私やギン姉の身体のこと……知ってるんです

よね？」

「ティアナから話は聞いた。どういふ事情かは知らないがな」

平然と答える直人。

「その…どうも思わないんですか？」

恐る恐る問うスバルだが、直人の答えは先程と変わらなかった。

「別に。俺はお前達への接し方を変えるつもりはない」

その途端、スバルの表情が一気に明るくなった。

「さすが直人さん！器が大きいですね！それはそうと、“あれ”は帰らないんですか？」

スバルの指さす先には、模擬戦場にて座り込んでいるブイレックスの姿があった。

「あれは自己修復機能だ。ブイレックスは一定のダメージを受けると、あのまま24時間動けなくなる」

現にブイレックスの頭部には傷があり、その部分がオレンジ色に光っている。

「怪我してる…」

苦い表情を浮かべるキャラ。

「痛いだろうね。今回の敵は、なのはさんやフェイトさんでも勝てなかったらしいから…」

そう言いながら俯くエリオ。

「…あれ？ヴィヴィオ、どうしたの？」

そう言ったスバルの隣には、目に涙を浮かべているヴィヴィオの姿があった。

「……直人おにいちゃん。あのキョウリュウさん、けがしてまでここをまもってくれたの？」

「まあ…そうなるな」

自身を見上げるヴィヴィオに対し、直人はそう答えた。

「…それなのに…こないだキョウリュウさんのこと、こわいって言うっちゃった…」

先程スバルに言われた一言をヴィヴィオはずっと気にしていた。

『ブレイックスはヴィヴィオやこの皆、なのはさん達を守るために来たんだよ！』

「ごめんなさい…キョウリュウさん…」

そう、ヴィヴィオはブレックスに対して罪悪感を抱いていたのだ。だがブレックスは生体メカであるため、ヴィヴィオの心情を理解することは不可能だ。

「優しいねヴィヴィオは。ブレックスも、『これこそ怪我の功名、ヴィヴィオやみんなを守れてボクも嬉しい！』って言うてるはずだよ！」

勝手にブレックスの通訳をしながら、スバルがヴィヴィオの頭を撫でる。

ブレックスが理解出来なくとも、周りはヴィヴィオの優しさを理解していた。

「…俺は八神部隊長と今後について話してくる。お前達はシグナムとヴィータの指示に従え」

直人はそれだけ言い、避難所を後にした。

*

「え！？攻撃魔法が効かへん！？」

医務室にて、手当てを受けたのはとフェイトから、フランシィの

話を聞いたはやてが愕然とする。

二人とも負傷したものの、入院するほどの怪我ではない。

なのはは頭に包帯を巻いており、フェイトは松葉杖をつくだけで済んだ。

「どうりで苦戦してたわけや…」

「直人さんが来てくれたから何とか助かったけど、このままじゃ打つ手無しだね…」

フェイトがうなだれたその時、

シュン！

扉が開き、直人が入ってきた。

「怪我の具合はどうだ？」

「あ…直人さん、お疲れさま。二人とも大丈夫だよ」

直人に会釈するはやて。

「ところで滝沢さん。さっき言った、「とうとう来た」ってどういうことですか？」

なのはが壁にもたれかかる直人に問う。

「ああ、あれは“魔力が通じない敵”という意味だ」

「魔力が通じない敵…？」

そう、直人は予期していたのだ。

時空管理局の局員は魔力に頼りっぱなしなため、当然クローンズファミリーも魔法対策を立ててくる。

魔法に関してはド素人の直人が真っ先に考えたのは、攻撃魔法が通用しない敵の登場だった。

「ああ。現に高町さん達の攻撃はゼニットにしか通用しなかった。30世紀から来たクローンズの技術や規模もわからない以上、油断は禁物だ」

「確かにそうだ滝沢君。君の言うことにも一理ある」

声をした方を向くと、地上本部所属のスペンサー・ギブソンがドアを開けて入ってきていた。

「『ギブソン少将！』」

すぐさまなのは、フェイト、はやて、直人の四人が彼に敬礼する。

「六課が襲撃を受けたと報告を聞いて来たが、皆に大した怪我が無いようにで安心したよ。しかし、攻撃魔法が通用しない敵か…確かに厄介だな。レジアス中将が生きていれば、それなりの対策が立てれるのだが…」

（レジアス・ゲイズ中将……JS事件で死亡した地上本部の総司令官か…）

スペンサーの口からレジアスの名を聞いた直人は、以前見たレジアスの資料を思い出した。

古くからの武闘派で六課の活動にも否定的であったが、地上の安全を守り続けてきた英雄と考える者が多い男である。

浅見グループ会長・浅見渡と違い、腹の内を読みやすそうというのがレジアスに対する直人の第一印象だった。

（確かに中將が生きていれば取り入り易そうだったんだが…）

相変わらずの野心家ぶりである。

「——君、聞いているのか？ 滝沢君！」

「あ…申し訳ありません。なんででしょうか？」

考え事を中断し、直人はスペンサーの方を向く。

「私としては…君にクーロンズファミリー対策を任せようと思うのだよ。当分の間、高町教導官とテストロッサ・ハラウン執務官は前線に復帰できない。しかも彼らに対する有効打は、今のところタイムファイヤーとブイレックスのみ…君しかないのだ」

(……！)

直人は心の中で、これはチャンスだと考えた。

理想主義者の言葉を聞いても尋麻疹は出なくなったものの、彼の出世欲は強いままだ。

「それは構いませんが、私は一等陸尉“待遇”です。厳密には一般人の身分ですので、あまりお力になれないかと…」

「ああ。わかっている」

そんな発言を予想していたのか、スペンサーはすぐさま頷いた。

「滝沢直人君。今日から君を正式に局員として迎え、三等陸佐に認定する。誰も異存はあるまいな？」

なのは、フェイト、はやての三人を交互に見るスペンサー。

「…そうですね、ギブソン少将。私達は何も出来ないし、直人さんなら…」

「私もそう思います。滝沢さんなら安心して任せられます」

隊長陣二人からは、特に反対意見は出なかった。

「確かに直人さんには当分の間、二人分の仕事をお願いすることになりますから。私も賛成ですよ」

はやても笑顔で了承した。

「では滝沢三佐。八神部隊長のフォロー、改めてよろしく頼むよ」

バツ！

直人は黙ってスペンサーに敬礼しつつ、内心ではガッツポーズをとっていた。

（やったぞ…！）

正規の局員に採用されただけでなく、一階級昇進というお年玉もついてきたのだ。

これで喜ぶなという方が無理な話である。

「早速で悪いけど直人さん、ギンガとティアナを迎えに行ってくれへんかな？」

はやてが直人に対し、笑顔を向けて頼む。

「俺が？」

「お願いします直人さん、二人とも喜びますよ。私の車使ってください」

車のキーを差し出すフェイト。

足を折ってしまったため、彼女は運転出来ない。

「了解した」

フェイトからキーを受け取り、直人は医務室を後にした。

「ところで少将。少将が滝沢さんを重用するのは何故ですか？」

直人が出て行った直後、なのはがスペンサーに問う。

何しろ直人もスペンサーも、今までロクに会話もしていないのだ。

「…確かにそうだな」

するとスペンサーはため息をつき、口を開いた。

「本局ばかり優秀な魔導師が採用されることで、衰退しつつある今の地上本部には滝沢君の力が必要なのだよ。レジアス中将亡き今、私は彼をミッド地上の未来を守る象徴と考えている。仮に未来が変わえられないとしても、自分達の明日くらいは変えたいじゃないか」

「「「……」」」

スペンサーの決意に驚くのは、フェイト、はやて。

彼はあまり自分の事を他人に話さないのだ。

「さて、私はそろそろ戻るよ。見送りはいい」

「は…はい！」

三人が敬礼する中、スペンサーも医務室を後にした。

*

「ギブソン少将って、考えがはつきりしている人だね」

三人で廊下を歩きながら、フェイトがそう呟く。

「そうやなあ。ナカジマ三佐から聞いてた通りの人やったな。自分達の明日を変えたい、か…」

はやてはこの時、直人の死に際の言葉を思い出していた。

『浅見…お前は…変えてみせろ』

（そうや…直人さん達も自分の明日を変えたかったんやな…！）

はやては遂に、その意味を確信したのだった。

「…よっしゃ！なのはちゃん、フェイトちゃん。私らもちよつとずつ、六課の明日を変えてみよか！」

「うん！」

「そうだね、はやて」

なのはとフェイトも笑顔で頷いた。

Case File 14 自分達の明日（後書き）

前回の直人とティアナに続き、ヴィヴィオの心にも変化が訪れました。

ご意見、ご感想お待ちしております！

Case File 15 ギンガの心境（前書き）

今回は綺麗な直人全開です（笑）

この作品の目標は、総合ポイント500突破を目指しています！

あと挿絵を作りましたw

> i 3 8 5 7 5 — 3 5 5 1 <

Case File 15 ギンガの心境

「ごめんなさいね、付き合ってもらって」

「いえ！ギンガさんに何も異常が無くてよかったです！」

夕方、クラナガンの医療センターより、治療を終えたギンガと付き添いのティアナが出てきた。

「迎えが来るってなのはさんから連絡がありましたけど……あっ！」

センター前に停まっている一台の黒い車が二人の目に入った。

「あれはフェイトさんの……」

だが運転席に座っているのは紺色の服を着た男……滝沢直人だ。

「直人さん！迎えに来てくれたんですか？」

「ああ。乗れよ」

「はい！」

直人に頷いたギンガが助手席に、ティアナが後部座席に乗り込んだ。

「よし、帰るぞ」

アクセルを踏む直人。

三人を乗せた車は医療センター前から発進した。

＊

「……あの、滝沢さん……」

六課への帰路を走る中、静まり返る車内にてティアナが第一声を放った。

「ん？」

「えっと……その……今まで失礼な事ばかり言っつて、すいませんでした！」

ティアナが直人に発した言葉……それは謝罪だった。

「私……滝沢さんのこと、誤解してました。今回の敵と戦った時も、滝沢さんの訓練のおかげでいつもより速く動けましたし……」

「そんなに効果的なのか？」

直人の訓練に参加したことがないギンガがティアナに尋ねる。

「はい、ギンガさん。ですから滝沢さん、これからもうご指導お願いします！」

そう言ったティアナは運転席に向けて軽く頭を下げる。

「ああ、わかった」

バックミラー越しにティアナを見た直人は、そう返すと再び前を見た。

「直人さん。よかつたら私も、明後日から訓練に参加したいんですが…」

ここでギンガも、訓練の参加を申し出た。

「別に構わないが、身体の方はいいのか？」

「はい。明後日には復帰できますし、こうして直人さんが迎えに来てくれましたから！」

ニコツと微笑むギンガが直人の方を向く。

「…なら好きにしる。もう着くぞ」

直人の言葉通り、車は六課隊舎の前に停車した。

「先に戻っている。俺は車これを置いてくる」

「「はい！」」

二人が降りたのを確認すると、直人はアクセルを踏んで駐車場へ車を走らせた。

*

「あ、二人ともおかえり！」

六課に帰還したギンガとティアナを、はやてが出迎えた。

「八神部隊長、ただいま戻りました」

二人がはやてに敬礼する。

「直人さん迎えに来てくれたやんな？」

「はい。ですが八神部隊長…昼間、滝沢さんは悪い人じゃないって言い切ったの、どうしてですか？」

ティアナがはやてに問う。

ずっと気になっていたようだ。

「…そうやな。やっぱり、二人には知ってもらった方がええな。ティアナは直人さんと何かあったらしいし、ギンガはギンガで直人さんにお熱みたいやしな」

はやてが意地悪くニヤリと笑う。

「べ…別にそういうわけでは…」

頬を赤らめながら、弁解を試みるギンガ。

「あはは！ごめんな、冗談や」

面白そうに笑うはやだが、やがて真剣な表情を浮かべてギンガとティアナの顔を交互に見た。

「悪いけど二人とも、今から私の部屋に来てもらえる？くれぐれも口外したらあかんよ」

「は、はい！」

「わかりました」

とりあえず二人は、はやてに付いていくことに決めたのだった。

*

パチッ…パチパチッ！

火花が飛び散るのを合図に、研究室にてダリルの作業は始まった。

今回は薬ではなく、メカを開発するようだ。

「おいゼニット、あの薬持ってきてや」

するとダリルの指示を受けたゼニットが、薬入りのボトルを一本持ってきた。

スッ…

「お、サンキュ」

ダリルはゼニットから受け取ったボトルを開け、魔力無効薬を左手前の装置の中へ注ぎ込んだ。

「ククク…これで囚人だけやなく、メカでも管理局を完封出来るわ！我ながら素晴らしい発明やなあ、ハハハハ！！」

*

部隊長室に入ってから30分後、ギンガとティアナが重い足取りで出てきた。

「じゃあ私はこれで…」

「…あ、はい」

ティアナはギンガに会釈すると、自室に向かって歩き出した。

（滝沢さん…やっぱり冷たい人じゃなかったんだ…）

はやてから直人の世界と彼の最期を聞かされたティアナは、直人に対する認識を完全に改めていた。

以前は彼のことを嫌な男だと思っていたが、今は違う。

（不器用で…素直じゃなくて…独りで…でも優しい…）

*

直人に対する認識が変わったのはギンガも同じだった。

『助けてええ！！』

助けを求めてゼニットから逃げ惑う少女の悲鳴が、ギンガの脳裏に焼き付いて離れなかった。

何故なら、昔の自分と重なっていたのだから…

『……ああ……ぐはッ、う……ぐッ……』

『お、お兄ちゃん……』

『……早く……逃げろ……』

『……でも……』

『……行けえ!!』

だが直人は自らをボロボロにしながらも、一人の少女を救ったのだ。

「そういえば、あの時も…」

『危ない!!』

巨大化したムガインとの戦闘中、降り注いできた瓦礫から身を挺して自分を庇ったタイムファイヤー。

その後の生活では、わざわざ新しいハンカチを買ってくる律儀さと、ヴィヴィオにたじろぐ微笑ましさ、ギンガやスバルが戦闘機人だと

知っても特に驚かない冷静な一面も見せた。

そして今回はやてから聞かされた話により、以前に自分の命を救った執務官…フェイト・T・ハラオウンと同じく、滝沢直人は尊敬に値する人間だと彼女は改めて確信した。

同時に彼がヴィヴィオに初めて連れて来られた際、負傷した状態で服が穴だらけだった理由にも納得した。

（立派な人ね、直人さん……あつ！）

噂をすれば何とやら…とは少々異なるが、自販機前のベンチにて座り込んでいる直人の姿を見つけたギンガ。

だが疲れが溜まっているのか、彼はベンチで居眠りしている。

「直人さん、起きてください。直人さん」

ギンガが彼の耳元でそう呼び掛けると、身体をビクッと反応させた直人が目を開けた。

「…ギンガか。どうした？」

「こんなところで寝ると風邪ひきますよ」

そう言ったギンガは自販機に小銭を入れ、赤く光るボタンを押した。

…ガコン！

すると緑茶入りの温かいペットボトルが取出口に転がり込み、彼女がそれを取り出してすぐ直人に差し出した。

「はい、どうぞ！」

「…ああ、悪い」

ギンガに礼を言い、直人は彼女からペットボトルを受け取った。

「八神部隊長から聞きましたよ。局員に採用されたんですね、おめでとうございます！」

「もう聞いたのか？まあ高町さん達が負傷したからな、俺が二人分の仕事をこなすことになったんだ」

やれやれといった感じでため息をつく直人だが、新たな力を手に入れたと感じているのか、その表情はどこか活き活きとしていた。

（大変そう…）

そう思いつつ、直人が着用するシティガーディアンズ制服の破けた穴に目をやるギンガ。

その穴こそ、直人が幾つもの戦いをくぐり抜けた証拠だった。

「…もうこんな時間か。これ、ありがとな」

右腕の腕時計をチラ見し、直人がベンチから立ち上がる。

「直人さん、余計なお世話かもしれないですけど…少しお身体を大事になさった方がいいですよ？」

ギンガの心配も尤もである。

本人が望んだとはいえ、今の直人はかなり無理をしている。

戦闘は実質一人で引き受け、今回もなのはとフェイト二人分の仕事を任されたのだ。

「……」

そんな直人は少し驚いたような表情を浮かべ、ギンガの方を見ていた。

「…あ、すまない。俺の体調心配したの、お袋以外ではお前が初めてだったからな」

軽く笑っていた彼だが、やがて首を横に振った。

「だが俺には“力”が必要なんだ。生きるためのな…」

そう言い残し、直人はそのまま自室へと戻っていった。

「無理だけはしないでくださいね！」

疲れ切った大きな背中に呼び掛けるギンガ。

すると直人が左手をあげて軽く手を振り返した。

そして彼は角を曲がり、ギンガの視界から完全に消えた。

Case File 15 ギンガの心境（後書き）

…恋愛描写が下手ですみません（^ー^；）
何しろ書くの初めてなもので…

一応今回の話で、ギン姉は直人に完全に想いを寄せ始めました。
感想や評価などありましたら、お気軽にお寄せください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5117x/>

魔法少女リリカルなのはStrikers やってきた炎の戦士

2012年1月10日23時46分発行